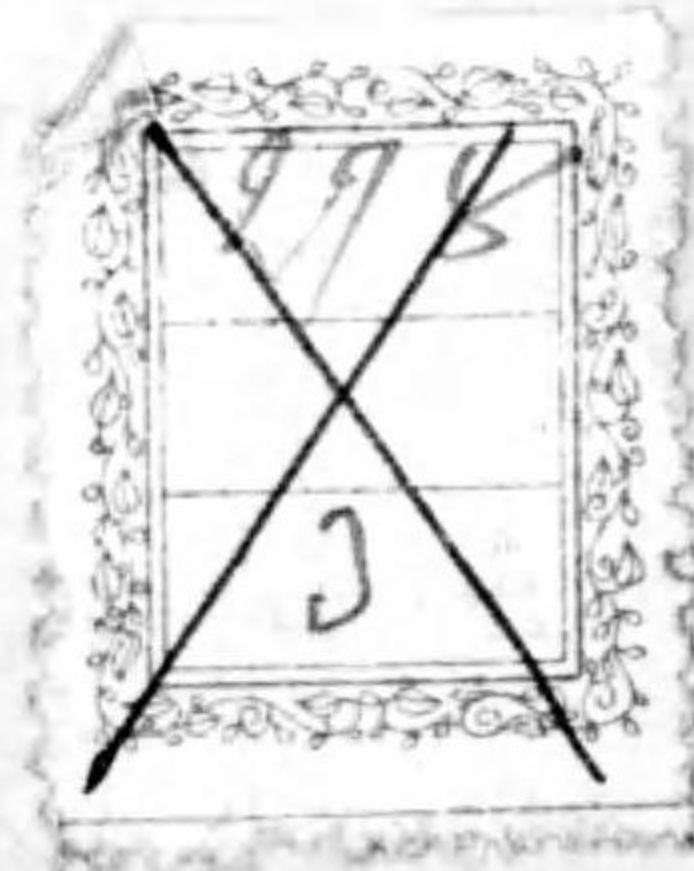
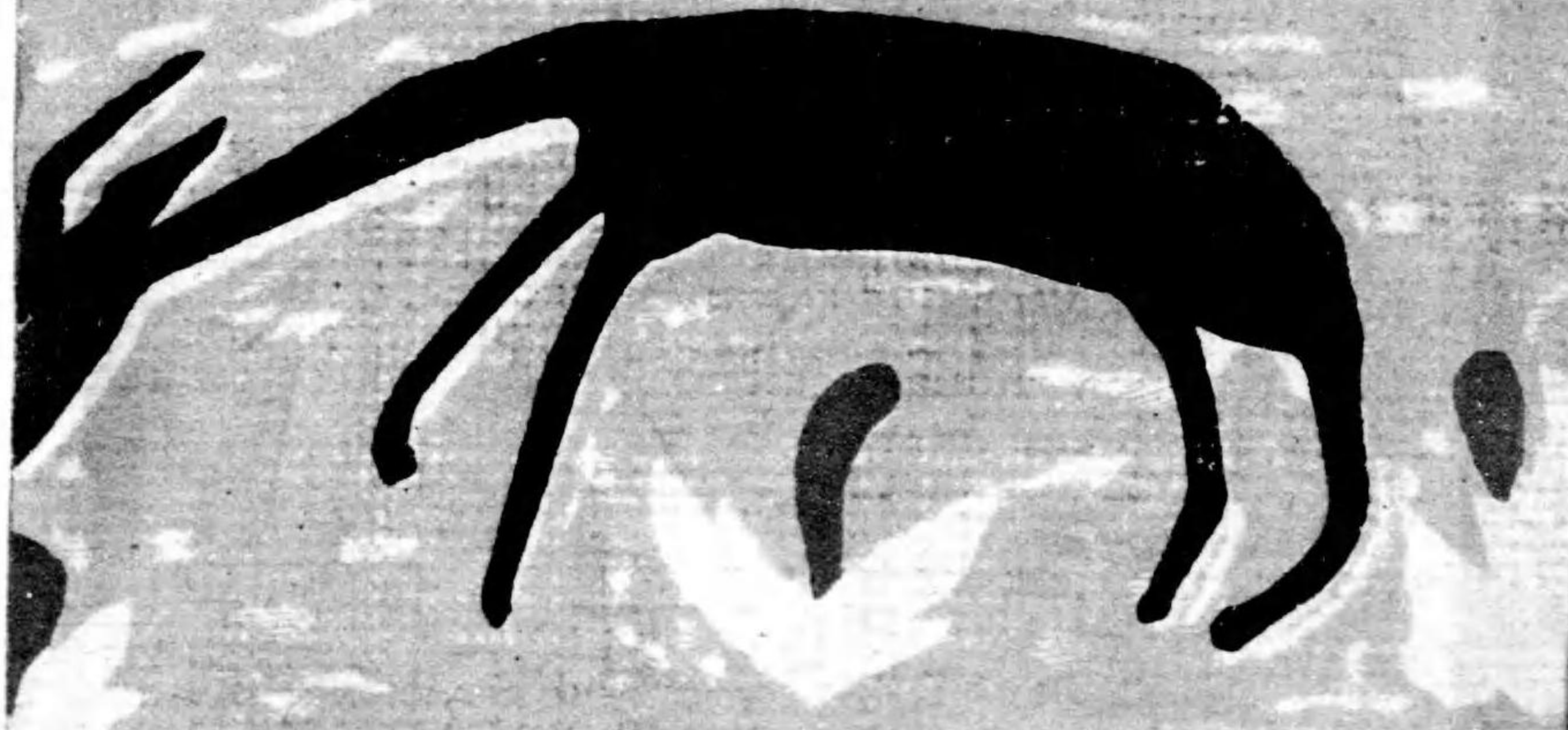


編四十三第書叢明特100

屋 桐

395

著 雄 末 藤 後



始



持100
395



文明叢書

第三十四編

大正
3. 11. 4
內交

文明叢書發刊の辭

獨にレクラム叢書在り。英にカツセル叢書あり。佛にネルソン叢書あり。皆世界百科の書を網羅し、内容の充實と價格の低廉と相まちてあらゆる階級の讀者に布遍し、各國知識の開發者たると共に世界文明の指導者たり。而して今迄我日本に此の種の叢書の出づべくして出でざりし事は實に出版界の缺陷にして又實に吾文明の缺陷なり。小院茲に見る處あり、今や乃ち「文明叢書」の出版を企て、最善の力を之に致さんとす。希くば賢明なる讀者の深厚なる同情によりて、叢書の篇を重ねるに隨ひ、我が同胞の各戸に最も完全にして最も便利なる圖書館を建設するを得んか。

發行者謹白

桐屋

後藤末雄

桐屋	一
毒杯	五五

桐屋

奥さん。

——この拙き物語を満壽子夫人にさしぐ——

夜長の徒れよながに、憐れな世間話をお聞き下さいまし、さりとして耳遠い昔話では御座いませんが、ちやうど私どもが母親の懷ろに抱かれてをりましたころ、言ひ囃された憂世話で御座います。まあお聞き遊ばせ……………

なにやらで名だかい四つ目屋の筋向ふに、桐屋といふ珊瑚珠問屋がありました。このうちは元祿の昔から賣り込んだ大店で、兩國の桐屋といへば誰れ知らない人もありません。日毎／＼に老舗の暖簾がさびれて誠に心ぼそい町内の有様でしたが、この桐屋ばかりは昔

にまさる繁昌で、日よけのかけから、お客の姿が溢れてをりました。けれども、どうした譯か、男の子は御座いませんが、お淺お君といふ姉妹がありました。

奥さん。ふたりの眉目かたちは是ぞと申して見覺えてる人も御座いませんが。とにかくお君の方は色白な、細おもての器量よして、瞳の奥から深い思ひと怪しい光が仄めき、指先の細い、爪ぎはの紫いろをした神経質の娘に違ひありません。なによりお君は、變りものでした。笑ひ上戸の娘ざかりから離れの茶座敷にとち籠つて、めつたに顔を見せないこともあります。この茶座敷はお祖父さんが隠居をしてから建てました數寄づくめの拵へで、飛石づたひに藤棚の下を通つて枝折戸をあけますと、小さい竹藪のかけから水屋の窓が見えまして、まことに閑靜な、山里の趣きがしのべれます。さすが茶座敷だけに網代の低い天井、利久好みの小窓など、凝りぬいた立すまひに、わざ／＼鄙めいた草葺で町なかに珍らしい銀杏や楓がこんもりと繁つてをります。それですから茶室には日影がさしませんで、いつも濕つばい薄暗がり、樹々の香ひと肌寒い潤ひがぞつと身にしむ氣味悪るさ。茶根岸の

壁には蛸蟪のあとが残つて眞夏にも蝸牛が角を立てて竹縁を這つてをります。月夜や雨夜はまだしも、あの木枯しが板戸をうつて犬の遠吠えが聞える暗夜には、どれほど、怖しいこととせう。なにより土一升金一升の土地に、こんな茶座敷があらうとは、うけとれませんが、さすがに大家の奥庭には違ひありません。さてお君が十六の春、山おくの庵めいた茶座敷にとち籠つてから、ちやうど三年の月日が立ちました。

奥さん。お君は、なんとといふ變りものでせう。

それですから母親のお京が、

「あの子はほんとに變人だよ。やつぱりお祖父さんの氣性がのりうつたのかも知れない。行末が案じられるね。」

と眉をひそめてゐたのも無理はありません。

まつたくお祖父さんの氣質が知らず識らず、のりうつたのに違ひないのです。お祖父さんは隠居のくせで朝から晩まで茶室にとち籠つて道具いぢりに餘念もありませんでした。

が、その暇には秘藏子のお君を呼びよせて孫娘の笑顔に老いの苦勞を忘れてをりました。お祖父さんは十年ほどまへに、お祖母さんに先き立たれて、懐しい昔を呼びかへすよすがもなく骨董いぢりや、お君を相手にして淋しい心を忘れてゐたのでせう。お君はお阿父さんが大好きで、子供心にも皺だらけのお顔、銀のやうな頬の髯、海老のやうな腰つきを見ますと、ほんとにお可哀さうでしたから夜もお祖父さんと枕を並べて茶座敷に臥せりました。ある朝、もう雀が鳴きだしましたから、お祖父さんを起しましたが、なか／＼お目が醒めません。お君はいくたび呼びましても白い眉毛のしたからお眼が開きませんし、御返辭もありませんから不思議に思つてお顔を見ますと、いかにも好い心持さうで、微かな寢息も聞えるやうです。お君は暫らく寢顔を見つめてをりましたが、

「お祖父さま、お起きあそばせ。夜があげました。」

と繰り返しながら搔卷の肩さきを搖すぶつても、お起きになりませんから、飾は／＼袖口からお手にさはると、ぞつとする氷のやうな冷めたさ。

お君は死骸と枕を並べてゐたのです。初めて「死」といふものに指先をふれたのでした。

さてお葬式も立派にすみましたすが却つてそのあとが底氣味悪い怖しさで、お化けが出るの、幽霊を見たのと言ひたて、朝でさへ茶室の前を通る人もありませんでしたが、お君ばかりは平氣で茶室に臥せりました。そのうちに何時かお君の居間ときまつてしまつたのです。それはまだしも櫛、筭に浮き身をやつす娘ざかりのお君がお祖父さんのやうに道具いぢりをはじめ、日がな、夜がな軸物を掛けかへたり置物を手にしながら見とれてをりました。それですから仇めいた話は薬にしたくもありませんし、浮々した娘ごころは夢にも知りません。戀といふ心持も物の本で讀んだ位で、氣ちがひ沁みた心中沙汰も、なかしなことだと思つてをりました。さうして毎日／＼薄暗い茶座敷にとぢ籠つてをりましたせゐか、顔いろも蒼ざめ、髪にも艶がありませんで日かげの花に似てをりました。

奥さん。珍らしい話では御座いませんか。茶座敷でしたから、まんなかに小さい爐が切

つてありました。お君はこの爐を見ますとお祖父さんの「心」のやうに思はれて、むかしはあ
 か／＼と炭火が燃えてをりましたのに、今は蓋がしてありましたから、なにとなく死んだ
 魂たましひのやうにも思はれます。それに御自分で墨をお引きになりましたし、永らく棲んでゐら
 した茶室のせゐで、薄暗いあたりの壁には、お祖父さんの日記が書かれてゐるやうで、亡
 き御靈みたまも潜んでゐるかと思はれました。とりわけ御秘藏あそばした雪舟の軸や交趾の香爐
 や象牙彫りの壽老人などには道具好きな御心がかくれてをりましたし、美術品には、それ
 ／＼藝術家の心の影がやどつてをりましたから、茶室にどち籠りましたお君が知らず／＼
 お祖父さんの氣質きだてにかぶれて、若い心に藝術の香ひが溢れてきたのも、あながち無理なこ
 とではありますまい。

さてお君の居間には古めかしいものばかりありましたが、たつた二た品ほど、まつたく
 趣きの變つた舶來の物がありました。それは西洋の裸人形と懸時計なのです。この裸人形
 は、つひ昨年の夏、室町の叔父さんが、いつもの凝り性から庭の眺めをかへようとして、

古井戸をほり掘りましたをり、植木屋の鋏先にかかつて掘りだされたものでした。青銅からかね
 製の小さい像を手のひらにのせて、黄の光に透かしてをりました植木屋の顔には、佛像で
 も掘りだしたやうな、小判でも掘りあてやうな敬いと歡びの色がさしてまゐりました。年
 よりの植木屋は、しほ／＼した眼を見すゑておましたが、

「なんだ詰られえ。耶蘇だ。」

口ばしつた昔が笑ひと一緒に小さい銅像ブロンズは土だらけの手からおちました。そばに見張つ
 てゐた叔父さんが、取りあげて見ますと、あられない裸人形で、ちれた髪の毛、星の
 やうな眼ざし、果肉のやうな唇、葡萄のやうな乳房には、どことなく淫らな匂がして、戀
 ざめた心まで恍惚うっとりとしてまゐりました。

「いつたい何んだらう。珍らしいもんだ。とんと解られえ。」

と叔父さんが眼鏡越しに見詰めてをりますと、あの皺だらけの横顔が若やいでまゐりま
 す。ほんとに柔い、温かさうな肉付、あてやかな、媚めなまかしい裸姿、けれども何處となく

女神のやうな崇高さがほのめいて、肩先にあたつた鉄さきの傷あとから生血が流れてきさうです。

叔父さんは暫らく恍惚と考へをりましたが、なんと思ひあたりましたか、につこり笑ひました。淫らな西洋人は婦人の裸姿を大そう賞美すると聞いてをりましたから、これも嘘かし閨房の玩具だと思ひ込んだのでせう。さうして戀り者のお君には好い掘りだしものだと考へてわざ／＼贈つて下すつたのです。

奥さん。この裸人形は、いつたい何んでしたらう。もつとも聖像ではありませんが、その様子からいへばヴェニスの小さい銅像に違ひありません。きつと邪教の禁令が出て御詮議が厳しかったころ、この銅像も聖像にゆかりのものだと考へて、樹蔭の古井戸へ投げ棄てたのでせう。さうして幾年も／＼落ち葉のしたに埋れて古井戸の底に眠つてをりましたのに、今は美しい死骸のやうに掘りだされて、とう／＼お君の手に傳はつたのです。

それから掛時計の方は（ふとした手づるで先代が買ひ込んだ物で、なんでも錢屋五兵衛

が遠い遠い西の國から千石船に積んできた品物ださうです。それは、あたりまへの掛時計ではありませんで、今でも旅館の食堂などで、わり／＼見つける古雅なもので御座います。時計の上部は教會風の廂をして象牙の針が圓い數字板を辿つてをります。そのしたには松の實がたの重い分銅がさがつて一時間たちますと、廂のしたの窓があき、白い小鳥が顔をだして、ぽつ／＼と鳴き立えます。その小鳥は子規ださうでこの時計を子規といふさうです。

奥さん。淋しい茶室の夜あけからお君の眠りを呼びさますものはこの掛時計でした。あの白い小鳥の歌です。それから宵の眠りをそそののは燭臺の灯かげにおいた戀神の小さい銅像なのです。お君は浮世ばなれた茶座敷でお祖父さんのやうに骨臺いぢりをしてをりましたか、そのひまには何をしておたでせう。やつぱり娘ざかりの浮氣心から笑ひこけてをりましたか。それとも涙もろい娘氣から啜り泣いてをりましたか。お君は人形いぢりをするほど子供ではありませんし、追懷に泣くほど憂世の味は知りません。獨りぼつちで考へ

てをりました。ぼんやりと思ひ耽つてゐたのです。

獨りぼつちの肅めやかな樂しみ、孤獨の淋しさ、美しさ。獨りぼつちの憧れほど自由な放埒な樂しみはありません。孤獨の境に悪魔の姿が現はれ、淋しい心に淫らな思ひが炎えますとか。とにかく世間ざらひのお君は十六の春から、この茶室にとど籠つて今年の暮れまで、獨りぼつれんと考へてゐたのです。

奥さん。つひ大事なことを言ひ忘れてしまひました。世間の噂によりますと、お君の足は水鳥のやうに指先が付きあつてゐたさうです。嘘ですか、ほんとですか。あのバダウクといふ御妃のやうに水鳥の足をしてをりましたか。きつと物好きな世間の拵へごとでせう。

さて、お話は除夜のことから始まります。もう大晦日の夜も更けてまゐりました。しとしと沈みかかる夜にほひ、忍び足のやうな肅めやかさ。もう高張の灯影も薄れてゆきます。

憂世を他處にした茶座敷にも、もう古い年の吸り泣きが聞えて、細目にあけた兩戸から行燈の片あかりが射してをりました。

お君は、もう枕に就かうとしたのです。そのとたん、あの掛時計から白い小鳥が顔をだしてぼつ／＼と鳴きたてます。若い母親が亡くなつた子供の年ごろを懐しむやうに、お君は指をりながら時計の音をかぞへて、ぢつと數字板を見つめてをりました。大晦日の夜ふけにこの掛時計は神秘的な生きもののやうに思はれて、象牙の針は手足のやうに廻はつて行きます。「時」が歩いてゆくのです。「生命」が通つてゆくのです。チツクタツクの音、心臓の響き、——この二つに何の違ひがありません。お君は小耳をすまして乳房の音を聴いてをります。一栗づつ生命のおちる音……

お君は時計を見直しました。二つの針が水ぐるまのやうに淀んだ時間を流してをります。鞭のやうに生命の足撞きを早めてをります。お君は指先で象牙の針をとめやうと思ひましたが、

「あゝ、時計をとめたつて仕方がない。時計を壊はしても時間はたつて行く……」
 と今さらのやうに思ひだすと、「時」の素足に觸れたやうに冷めたさが、しと／＼胸にし
 みて、言ひ知らぬ果敢なさが心の底から湧いてきました。お君は、ぼんやりと掛時計を眺
 めてをりました。

もう一ぺん象牙の針が重さなれば今年も暮れて新らしい年が生れてまゐります。死にか
 かつた年の息づかひ、生れかつた年の産聲が時計のかけと雨戸の隙間から聞えかけてを
 ります、お君は初めて「生」といふことを考へました。「死」といふことを考へました。ま
 た何うして此世に生きてゐるかとも考へましたが闇から闇へおちる心の自烈つたさ。考へ
 れば考へるほど暗闇へおち込んだやうに途方にくれてしまひました。

「あの掛時計は「死ぬく」と言つてゐる……白い小鳥が顔をだして、ぼつ／＼と鳴き立
 てるよ、わたしは、だん／＼寒れてゆく。さうして若い日も夢のやうに立つてしまふ。
 いつかお老婆さんになつて死ぬことだらう……」

と眩きながらお君は時計を見つめてをりました。「死ぬぞく」といふ時計の囁き、――
 お君はお祖父さんと亡き骸と枕を並べてゐた事を思ひだしました。お祖父さんの死顔が目
 をかすめたとたんに、壁の暗闇から御姿があり／＼と脱げだして行燈の灯かげに佇むと、
 蒼白い唇を動かして「お君く」と呼んでゐらしやいます。お君はあまりの怖しさに、うつ伏
 して目を潰ぶりますと死骸に觸つた指先の冷めたさが甦つて、肌えがぞつといたします。
 あたりは深い／＼沈黙の淋しさ。夜ふけの風が雨戸をもれて行燈の灯が瞬きます。暗闇
 の香がつのつて、からだ身體が曳き摺られるやうな怖ろしさ、お君の額からひやあせ冷汗が垂れてまゐり
 ました……

そのうちに物怖ぢも薄らいでまゐります。怖は／＼頭を擡げて四邊あたりを見ますと、もう御
 姿も見えません。行燈の灯がけに瞳をそらすと、あの小さい銅像ブロンズが目に這入りました。お
 君は其れを取りあげて見ますと、いつのまにやら柔い肌えに青さびが吹いて、この夜さむに
 裸姿が痛はしく思はれましたが、お君はぢつと見つめてをります……

年越しの夜ふけにヴェニス^{プロンズ}の銅像は何を囁いたでせう。お君の心が青さびの胸に忍び込んで、手のひらにのせておたせぬか、青銅^{からかね}が温まつて、小さい唇が赤くなると、青い瞳がばつと光りました。ふと追懐^{おちひで}が浮んできました。それは夏祭の夕ぐれでした。親類の娘に誘はれて嫌や／＼ながら店藏の窓で、おもての賑はひを見てをりますと、ちやうど繪行燈の火の這入るころでした。柳橋の歸りでせう、若い異人がお酌の手を牽いて、片言まじりに何やら話しながら桐屋の前を通りましたが、ふと二階を見あげて、ちつとお君の顔を見つめてをりました。お君は、につこり笑つてしまひました。なにか心ありげに思つたのでせうか、その異人はお酌の手を牽きながら幾度もふりかつて、さも残りなしげに代地の方へ曲つて行きました。お君は顔を見合せて我れ知らず笑つたのが、ほんとに恥かしくつて、俯向^{うつむ}いてをりましたが青い瞳の笑顔が目にしみておたのです。それがいま小さい銅像^{プロンズ}の面影から呼び返されたのでした。すると今まで夢にも知らない心持、魂の牽きつけられるやうな人懐きさ、胸から「心」の牽き出されるやうな、遺瀨なさ、——お君は何時の間

やら片袖を握りしめてをりました。

「あゝ切ない、淋しくつて／＼仕方がない。これが戀といふ心持なのかしらん……」

と獨り言を云ひながら、また銅像^{プロンズ}を見つめてをります。すると鍬先の傷あとから生血がたれさうでしたから、お君は銅像^{プロンズ}を袂に入れました。さうして泌み／＼と思ひ耽りました。

今まで覺えない心持、死の怖れと戀の切なさ、それも年越しの夜ふけに初めて感じたとは何んといふ不思議でせう。黒い心と赤い心を緬ひませにした怖しい心持、——この怖れから運命の礎が頽れて、眞黒な塔が築かれるのに違ひありません。その塔には翼の毒々しい異様な鳥が棲んでゐてお君を塔のなかへ攫つて行きます。さうして重い扉がしまると、あたりは眞の暗闇で、泣いても叫んでも助けにくる人はありません。暗闇には肌寒い潤ひと死の香ひが漂つて、怖しい羽ばたきが聞えます。あの鳥が出てきてお君の心や身體を啄むのも間がありますまい。

もう嘴の音がしました。あの鋭い嘴で乳房から啄みはじめ、肉を噛み、骨までしゃぶ

つて、瞬くひまに惨たらしい死骸とかはつてしまひます。なんとといふ怖いこととせう。
お君は行末の怖しさに身ふるひをしてをりました。

やがて掛時計の窓から白い小鳥が顔を出してぼつ／＼鳴き立てました。もう古い年が死んで新しい年が生れてきのです。

「とう／＼厄年になつてしまつた。あの怖い十九の厄年がきてしまつた。きつと災難が起るに違ひない。意地目られて泣くよりほかはない。泣いて泣いて死ぬのでせう……」
と思ひ込みますと、悪魔の爪音が肩とほそのかけから聞えます。

その途端に除夜の鐘が鳴りだしました。年越の眞夜中に、この鐘の音はどれほど怖しく、どれほど淋しく悲しく、どれほど響いたこととせう。病婦の呻り聲。怨靈をんりやうの獨白、——重い扉のかけから聞える吸り泣き、すがれた魂たましひの囁き、——生命いのちのくづれる音、黒髪の切れる音、——夕アンジェリス梵の鐘をきく尼君のやうに、お君は細く／＼消えてゆく鐘の音の行方に聞きとれてをります……すると行末の果敢なさが、しと／＼と身にしみて涙が湧いてきました。

てきました。

やがて枝折戸のあく音がして、

「お君さま、福茶が這入りました、どうぞ入らしやいまし。」

と小間使が雨戸のかけから申しました。

「いま行くよ。」

とお君は悪い夢でも見たやうに、ぼんやりと目をこすつて、よろめきながら立ち上がりました。袂にはあの銅像ブロンズが這入つてをりましたから……

さて目出度づくしの元日も、初賣、初荷の二日も過ぎまして、お寶を入れてさへ古い夢は見ませんで三日の朝になりました。そのうらに七草もたち鏡開きも過ぎました翌る日から、叔父さんの膝許から三番息子の新三郎を當分、家へ預ることとなりました。新三郎は見るから花車な若旦那で草雙紙にでも出てきさうな優男でした。

母親が可愛がり過ぎましたから可愛い子には旅をさせろで銀座邊の大店おほだなに奉公させてお

きましたがお内儀さんと、あられもない噂が立ちましたので、とうとう桐屋に預けられて窮命させられたのです。それほどですから生れ付きの色男で新三郎のためには裸になつた仇ものも少くはありません。さすが道樂者の習ひで大そう、さばけておまして、人好きもよく、女の大すきな笑談を澤山いひましたから、

「新三郎さま、新三郎さま、私が御用をいたしませう。」

と若旦那のない桐屋の奥では誰も新三郎の氣に入らうとつとめました。お君の母親も道樂息子の積りで預つた新三郎が商賣の道にも目鼻が開いておましたし、家へきてからは魂を入れかへたやうに夜あそびも致しませんから、もう夢が醒めたことと喜んでをりました。なにか下心でもあつたのでせうが、新三郎は叔母さん／＼と、ちやほやして下にも置かない取扱ひをしてをりました。それですからお君の母親は何にくれとなく新三郎に目をかけて、聲にでもしたやうにお君を呼びよせて茶話の相手なまました。けれども肝心なお君は新三郎が大嫌で當世風の髪、細い指先、すらりとした男まへ、美しいには違ひありませ

んが、それだけ新三郎が怖はくつて堪りません。

「あの方に違ひない。怖い災難を持つてきて私をいぢめるのはあの方にきまつてゐる……除夜の鐘を聞きながら思ひ込んだ行末の怖しさが、もしほんとの事になつたら

あの方の仕業に違ひない。ほんとに怖い方だ……」

とお君は思ひ込んでをりました。それですから出来るだけ新三郎のそばを遠のいてもう來てから廿日ほどになりましたが、新三郎の顔立さへ、まともに見たことはありません。横顔を見ても悪魔の素顔を見るやうでお君は、ぞつとしました。それですのに母親は新三郎を簪養子にするつもりでしたか、お君を茶座敷から呼びよせて夜長話の相手なさせました。好い時分を見計つて二人を置きざりにしたまゝ、寢部屋に這入つてゆきました。母親が立つてしまふと、鬼のそばへでも置き去りにさたやうで、お君は俯向きながらもぢくしてをります。

「ねえ。お君さん。貴方と私は何んにあたるでせう。貴方の阿父さんは私の叔父さんだ

し……なんてせう」

「ぞんじません」

「きつといとこ同士でせう」

「さうかも知れません」

とお君は氣のない返辭をして身をすくめてをりました。ことに其夜は雪解けの雨だれがして、とき／＼雪の落ちる音が致しますのに天井の鼠が騒ぎ立て、黄ろい洋燈の灯かげが瞬きます。それに寒い／＼身をきるやうな風が雨戸の隙きまから吹き込んで思はず、ぞつと致します。お君も新三郎も暫く黙つてをりました。

「お君さん。私がそんなに怖いのですか。」

「えい、怖はくつて堪りません。」

「ほんとうにさうですか。」

と言ひながら新三郎は、さも嬉れしさうに笑ひました。

奥さん。どうして新三郎は嬉し笑ひを漏らしたのでせう。お君が怖はがるのも何か思惑のあるせゐで、可愛いからこそ怖いのだと自惚れてゐたのでせうか。それとも厄年の乙女心にこれほど早く觸れることが出来たと考へて嬉しがつたのかも知れません。それから別に變つたこともなく一週間ほどたちましたが、小春日の朝でした。麗らかな日影が縁側におちて紅梅がかやつてをります。ふとお君は厠の歸りにこの縁側で新三郎と出逢ひました。さつそく行き過ぎやうとしますと、

「お君さん。お君さん。」

と新三郎が呼びとめましたから、嫌や／＼ながら振り返りました。

「字のくづし方を忘れて困つてゐるんですよ。後生ですから教へて下さいな。戀といふ字はどうくづすでせう。」

と新三郎は人形のやうな手のひらを眼の前に出しました。お君は、ふと釣り込まれて、「克く存じませんが多分かうでせう。」

と細い指先で、しなやかな手のひらに、戀と云ふ字をかきました。

「どうも有りがたう……」

と新三郎は白い齒せながら、にやり笑ひました。お君ははつと思ふと、

「御免あそばせ……」

と言ひすて、庭下駄を、つツかけましたまゝ茶座敷に駆け込みました。

お君はどれほど悲しかつたでせう。あれほど怖はがつてゐたのに新三郎の手のひらに戀といふ字を書きつけたのです。石のやうな悪魔の手のひらに戀といふ字を彫りつけた産相から、もう目には見えない宿命の綱が蜘蛛の巣のやうに振りかゝつて、お君の後髪うしろかみを引き摺つてまゐります。お君は茶室の片隅に坐つてさめくと泣いて居りました。

奥さん。お君にはお淺といふ姉があると申した筈ですがお淺はほんとの姉では御座いません。遠い血筋の忘れ形見で、引き取る人もありませんから桐屋の厄介になつてゐました。けれどもお淺の方が五つも年上なので姉さんとと呼んでをりました。お淺は、ふと

したいたづらごと情事から家には置けなくなつて、霞が關の御屋敷に奉公させておきました。いったい器量は色こそ白う御座いましたが十人並にも往きませんで、卑しい中低なかひ顔に薄べらな唇をして、口の利きかた、物の言ひやうなど承らく奥づとめをしてゐたとは受けとれません。それに落ち着きもなく品もありませんし、とりわけ御屋敷者のせぬか、淫らな話が大好きでした。けれどもお淺は奥様のお氣に入りて奥むきでは大そう羽振が好かつたさうです。このお淺が十五日の宿さがりに桐屋へ歸つてまゐりました。ほんとに籠をはなれた小鳥のやうに、べちや〜、饒舌り立て御菓子を食べ〜、笑談をいつてをりました。それから人の噂や陰口を言ひ立て、嫌やらしい大口を利いてをりましたが、ふと亂れ箱からはみだした献上の男帯を見つけてお淺は聞きました。

「ねえ。お君ちゃん。新三郎さまは何時から入らしたの……」

「なんでも鏡開きの日から……」

「おやさう。お前さんが御世話をするのでせう。おたのしみね。」

「あら。姉さん。」

とお君は顔を赤めて俯向きうつむきました。

そのうちに新三郎も用達してから歸つてまゐりまして、店も休みでしたから茶の間へ遊びにやつてきました。するとお淺は新三郎のそばへ、ぴたりと坐つて一時もそばを離れませんが。いつもの宿さがりには家へ歸つてまゐりますと、方々へ年始の顔だしをして、お晝からは春芝居へ行くのが判でも押したやうになつてをりましたのに、その日にかぎつて何處どこへもまゐりませんで新三郎の機嫌をとつてをりました。さうしてお君の前で、いやらしい戯ふざけ方を見せつけてをりました。お君は久々でお淺が歸つてまゐりましたことですから、嫌や／＼ながら相手ないたしてをりますと、新三郎が歸つてまゐりましたので一しほ怖しく思つてをりましたから新三郎とお淺の仲よく遊んでゐるのを見ますと、今まで、のしかかつてゐた悪魔からだの身體がお淺の肩へのり換へたやうで心が清々いたしました。

その日は長閑かな小春日で椽側の障子には水仙の花が映つて、そよ風に紅梅が香つてを

りました。中庭の片隅には去年の初雪が消えのこつて松の吊り枝に小さい奴嵐が懸つてをりました。お君とお淺は新三郎を取りかこんで黒梯の火鉢に手をかざしながら笑談を言ひ合つてをりました。お君は好い加減に切り上げやうと思つて立ち上りますと、

「何處へ………」

と新三郎は訊きました。

「ちよつと茶座敷まで………」

「まあ、好いぢやありませんか。」

「もつと入らしやいよ。お前さんに往かれると困るから………」

「なぜなの………」

「なぜつて………まあ入らつしやいつてのに………」

「まあ、お坐わんなさい。そんなに嫌ふもんぢやありませんよ。」

と新三郎に袂をつかまへられて、お君は坐つてしまひました。すると隣座敷で母親の咳

き込む聲が聞えました。それから三人は道中雙六をいたしましたが、お淺の札は日本橋の振りだしを出たばかりで、まだ箱根の關も越えませんし、新三郎の札は、大井川のせきどめで、また振りだしへ後戻りの憂き目に引きかへて、お君は、どうした運やら、とんとん拍手ひやうしに上がつてしまひました。

お淺は大そう口惜がつて、いくら賽おまじなひころに御咀禁おまじなひや、御願をしても、きつとお君が一ぱん上がりの仕合者です。すると襖があいて、

「みんな仲よくお遊びよ。」

と母親が蜜柑や切山椒を澤山持つてきました。紀文煎餅のなかには辻占が交じつてをりました。

「さあ辻占を取りませう。誰れのが好いかね。」

と新三郎が指先きで辻占を摘みますと、お淺も目を漬つぶりながら御咀禁おまじなひをして、あかい辻占を取りました。お君も取らないわけには往きません。誰れも好い辻占を願ひながらあけ

て見ました。

「おや、何んだつて「どうせ野暮な御屋敷者」だとさ。」

と新三郎は眉をひそめて讀みました。

「おや私のは「嫌はれるとは露しらず」……お前さんのは……」

とお淺はお君の辻占を覗き込みました。お君の辻占には「惚れた因果」と優しい假名文字で一ばん好い文句がかいてありました。誰れも、どつと笑ひましたが、あのお淺ばかりは、頻りに、皆んなの辻占を見くらべてをりますと、俄かに顔いろが蒼ざめて、

「どうせ野暮な御屋敷者ものですよ。」

と、さも怨めしげに辻占を爪先で破りました。

それから歌加留多や花合を致しましたが、肝心のお淺が氣を腐らして、ちつとも興がありません。そのうちに春の日は暮れやすく、いつか鴉の鳴聲がきこえますと、障子の棧おぢりが一こまづつ夕闇にそめられて、新三郎やお淺の顔に暗がりの面帕おぢりが掛つてまゐります。

「どれ洋燈でも點けやうか。」

と新三郎が立ち上りますと、さすがに女の嗜みで、

「私がつけませう。」

とお君が火鉢の抽斗から燥いた燐寸を取りだして吊し洋燈を點けますと、ぱつと黄ろい光がさしました。向では雨戸を立てる音がしますし、隣座敷の御佛壇には御燈明がつきまして、ちんと鉦の音がしました。するにお淺はさも苦しうな顔をして、

「なんだか氣持が悪いわ、……君ちゃん、床をとつて下さいな……」

と願ってお君に言ひつけました。

「そりや、いけませんね。それぢやお歸りにならないの……」

「ええ、お氣の毒ですが今日は泊つて行きますよ。」

と奥齒に物のはさまつた言ひ方をしてさも苦げしに胸もとをおさへて居りました。すると新三郎は、

「差し込みですか。さあ、看病して上げませう。」

と言ひながら嬾やかな手もとでお淺の胸をおさへやうとしますと、

「おや、お門違ひでせう……」

とは言つても、お淺はにつこり笑ひながら、新三郎の手元に縋りました。

お君は床を敷いてやりました。これを好いしほにして茶座敷に歸りました。それから燭臺をつけたり、雨戸をしめて、ぼんやりと考へ込みました。さうして掛時計から白い小鳥が顔をだして、ぼつ／＼と鳴き立て、耳に這入らないほどお君は獨りぼつちで思ひ込んでゐたのでした。

奥さん。御屋敷から宿さがりに歸つてまゐりましたお淺は、やれ頭がいたむの、寒むけがするのと言ひ立てて歸る様子も見えません。却つて御座敷では奥様が大さう御心配遊ばして病氣見舞に立派な果物の籠を下さいましたがお淺は假病と言ひ立て、一日でも一時でも新三郎のそばにゐたかつたのです。かれこれ半月も立ちましたら御屋敷からは幾度も御

見舞の女中が見えましたので流石のお淺も歸らない譯には行きません。

その朝はみぞれ霽まじりのひさめ氷雨が降つてをりました。お淺は番傘をさしながら枝折戸をあけて、飛石づたひに離れの茶室にやつてまぬりました。

お君は、わざ／＼、なにしに來たことかと思つてをりますと、お淺は平氣な顔をして新三郎と好い仲になつた行きさつから惚ろけ交じりのたかはなし高話をはじめて、とにかく櫻の咲くる御屋敷からお暇を貰らつて新三郎と一緒になる心組みだと惚れぬいた胸算用を並べて、

「れえ。君ちやん。一生の御願ひがあるの……：：：：聞いてくれて……：：：：」
と眞顔になつてお君を見つめました。

「姉さん。なんですの……：：：」

「あのれえ。君ちやんの名で手紙を送りますから新三郎さまに渡して下さいな。それから若しや浮氣でもなすつたら、きつと知らして下さいよ。」

とお淺は頼みました。もとより譯もない頼みでしたからお君は引き受けてしまひまし

た。するとお淺はさも嬉しさうに、せは／＼しながら庭下駄を穿き、傘をさして茶座敷の軒を出ました。もう歸るといふことでしたからお君は後から蹤いてゆきました。するとお淺は枝折戸に手をかけたまゝ振りむきました。さしかけた番傘にみぞれ霽交じりのひさめ氷雨が音をたてます。

「れえ。お前さん。私が居ないと思つて戀路の邪魔をしては嫌ですよ。若しものことがあつたら生涯怨みますよ。」

と恐しい目つきで、お君を睨みました。

奥さん。なんといふ淫らな女でせう。姉さん／＼と言はれる女の口から年下のお君に切ない戀を打ちあげ、手紙の手渡しを頼み、あまつさへ格氣深いおど嚇し文句を井べてゆきますとは……：：：：それも男をとこひでり日照のするお屋敷者のせゐでせう。けれどもお君は、ほつと胸を撫でおろしました。かれ／＼自分を狙つてゐた新三郎が、お淺と言ひ交はしたからには、もう災難のがれたやうな氣がして、除夜の鐘を聞きながら思ひ込んだ行末の恐ろしさも、

薄煙のやうに消えて行きました。

さうしてお君は初めて新三郎の素顔を、まともに見ることが出来ましたが、見れば見ゆるほど好い男で、お淺が惚れたのも、無理はないと思つてをりました。

それからは別に變はつたお話も御座いせんが、たゞお淺の處から届いた手紙を新三郎に渡してをりました。すると新三郎は、さも嬉しげに、

「毎度、お世話さま。いづれ御禮をいたしませう。」

とお君の顔を心ありげに見詰めました。あの優しい二重瞼の目もとから淫らな光が閃いて、見るさへ怖しさにお君は袖屏風をいたしました。

「そんなに私が怖いのですか。嫌ふものぢやありませんよ。」

と新三郎は、せいら笑ひを致しました。

奥さん。お君の心には、まだ怖れが歸つてまゐりました。「新三郎の手のひらに戀といふ字をかいた一生の過ちを考へて、苦しい／＼心の愁から大そう鬱いでをりました。ちやう

ど、その月の十五日はお祖父ぢいさんの三週忌にあたりましたから家の人達は今月の妙高寺へ連れ立つてまゐりました。お君はお寺へ行くが何より嫌やでしたが大そう可愛がつて下すつたお祖父さんのことでしたから往かない譯には行きません。

俚に揺られながらお祖父さんの死骸と統を井べてゐたことや亡き骸に指先を觸れたことなどを思ひだすと、初めて胸に湧きだした死の怖れがそろ／＼よみが甦へつてくるやうで、安い心もありません。やがて俚はお寺の門に着きました。鴉のとまつた伽藍の薨、松の樹蔭に古びた鐘撞堂、石塔や塔婆の井んだ墓地を見ますと、筑波風に死の香がかなつて、そろそろ嫌やな心持になつてまゐります。本堂へ這入りますと古びた天蓋、燻つた襖、剥げた經机、線香のほひ、燈明や蠟燭の焰なぞが遠い／＼死の御國をしのばして、お君はたゞ俯向いてをりました。

「皆さん。御覽あそばせ。不二山が克く見えますこと……」

と母親の手をかけた櫃子窓から雪晴れの空に眞白な不二山が聳えてをりましたが、お君

は見る氣にもなりません。そのうちに緋の法衣を着けた住職が壇に就きますと讀經が始まり、銅鑼、鐃鉢の音が響きます。お君は耳をおさへてをりましたが悲しい音楽が耳から心の底まで沁み込んで、死骸にさはつた指先が、だん／＼冷えてまゐりました。さうして眞黒な覆面の幻がお君の胸へ、のしかかつてきました。そのとき讀經の聲が一きは高くなつて、銅鑼、鐃鉢が、がらん／＼と響きましたので、ふと御佛壇の奥を見ますと、赤／＼とついた御燈明のかけから、お祖父さんの死顔があり／＼と現はれて「お君／＼」と耳許に御聲が響きます。お君は、あまりの怖しさに齒の根が、がた／＼ふるへて、目がくるめき、頭がいたんで、脊骨が冷えわたると、冷汗が流れてまゐりました。

程なく目が醒めますと、お君は庫裡の廣間に寢かされて、そばには母親や小間使が付いてをりました。

「もう好いかい。すつかり癒つたかい。いつたい、どうしたのだね……」

と母親は心配さうな、審しさうな目付で訊きました。お君は悪い夢から醒めたやうに、

暫らくは、ぼんやりして口もきけません。それから植半で御振舞があるといふので、みんな俵をつられてまゐりましたが、お君は母親と相乗りで家へ歸りました。

奥さん。妙な事ではありませんか。神経のせいで怖はい／＼と思つてをりますと、きつと怖いことが、ほんとに起つてまゐります。言はば自分の手から怖しい幻を拵へて、それを怖はがつてゐたのです。お君は死と戀の禍を怖れてをりましたが、ほんとにそれは、やつてまゐりませうか。けれども別に、かはつたこともなく、半月ほど立ちました。もう梅も散りかかつた頃、大雪がふりました。その翌る朝は素晴らしい雪晴れで、雪どけの雨だれが音を立ててをりました。すると火を入れたきた小間使が、

「お君さま。大へんなことが御座いますよ。奥藏の白壁に、とんだ悪戯書きがして……まあ、いらしつて御覽あそばせ。」

と笑ひながら申しました。ほんとに何が書いてありましたらう。お君は何んともなく氣に掛りましたから小間使と連れ立つて、裏口へまゐりました。

「まあ、いやですこと。どなたでせう。こんな悪戯いたづらがきをして……」
 と小間使の指さす方を見ますと、奥藏の白壁に相合傘をかき、新三郎とお君の名を並べて、いろ／＼とさへ書きそへてありました。お君は一目みますと嫌やな心持がして、もう見直すことも出来ません。すぐさま茶座敷に歸つて、ぼつれんとかんがへてをりました。

相合傘のしたに並べた二人の名はいたづら者を磔刑はりつけが獄門に曝らして、世間の見せしめにしたやうな氣がします。もう、こんな噂が立つやうでは、お淺にすみませんし、無實の罪から怒られましたら、身の破滅かと思はれます。いつたい誰れが書いたのでせう。お淺の手紙を手渡しにする處でも見つけて、こんな悪戯いたづら書きをしたのでせうか。相合傘をこのままにしておいたら、あられもない浮き名が立ちませうし、この悪戯いたづら書きの消えないうちは、お君の胸にも相合傘がかいてありますから、飛んだ柏子の間違ひで嘘から出た眞まこととなるまいかと、心のおくでは怖れてをりました。それですから、お君は何うあつても消さう

と心をきめて、人の寢静まるのを待つてをります……

その日にかぎつて何んたら時間の長いこととせう。掛時計の針が年老いた旅人たびびとのやうに思はれて戀人を待つやうな自烈つたさ、お君は茶室の軒から空を見詰めてをりました。そのうちに夕暮もすぎ夜もふけて、いつか眞夜中になりました。あたりは森として胸さわぎの音と髪かみのすれ合ふ音よりほかには何にも聞えません。

お君が雨戸をあけますと、身を切るほどの寒い風が吹き込んで廂から長い氷柱が下がつてをりました。空は降るやうな星月夜に雪あかりが射して眞晝のやうな明るさです。お君は庭下駄を突っかけ雪のふり積つた飛石を便りにして枝折戸の方へ一足運ぶと、思はず足を滑らして、燈籠に手をかけました。すると竹の葉末から雫がおちて襟先へ泌み込みます。枝折戸をあけ、裏口へ廻はつて、凍るやうな足先を踏みしめながら、とう／＼奥藏ひやあひの廂ひやあひ合に出ました。庭下駄に雪が挟まつて指先がちぎれるほど冷えますのにお君は、かぢかんだ両手に息を吹かけながら雪あかりを便りにして相合傘を探しました。どうしたのでせ

う。晝間見た相合傘が見えませんが。雪解けて雫が消したのでせうか。そんな筈はないと思ひながら目を見すゑて探しますと眞赤に錆びた折れ針のしたに相合傘がかいてありました。お君はもう一ぺん見直しました。やつぱり新三郎とお君の名は曝し者のやうに並んでなりました。いつぞや新三郎の手のひらに戀といふ字を書いてしまつたことを思ひだすと、お君の心には苦がいゝゝ愁が湧いて來ました。

「誰れが書いたのだらう……」

と思つて克く筆つきを見ますと何事ぞと。どんな亂れ書きでも、手つきといひ類しかたといひ、紛れもない新三郎の走り書きで、お淺へ送る封筒の記名と寸分の違ひもありません。この悪戯書きをしたのは、あの新三郎なのです。

「まあ、どうしてこんなことをなすつたのでせう……」

とお君は先づ驚きに打たれて怪しまない譯には往きません。それから、小石を拾ひ上げて、お君と書いた名を消してしまひますと、悪魔の手のひらから呪はれた名でも削つたや

うで、氣が精々いたしました。相合傘も消さうと思ひましたが手先が、すつかり、かぢかんで足先が干切れるほど寒いのにひやあひ廂合の風が身に沁みて、もう何うすることも出來ませんから踵を返しながら、ふと大空を見上げました。

寒いゝ、眞夜中の星月夜。數へきれない星の群れが家並の上から見下ろして、お君の作業を、囁し合つてゐる氣がします。お君は耳を澄ましながら空を見ますと、きらゝ、光る目つきで星が囁いてをります。お君は、ぼんやり考へなが相合傘を見ますと、自分の名は消してありましたが、新三郎の名は其儘のこつて相手欲しやな、物足りない様子をしてをります。

「姉さんの名を書かませう。さぞ嬉しがることぞせう。」

ふと思ひあたりました。お淺の名をかくにしても、筆も錐もありませんし、小枝さへ落ちてはをりません。お君は暫らく途方に暮れてをりましたが、ふと髪に手をやると、銀の平打がありましたから、手早く抜きとつて、お淺の名を彫りだしました。

やがて彫り終つてからお君はしげ／＼と眺めました。どんなに嬉しかったでせう。悪魔の餌食にはお淺が代つて呉れたやうな心地がして、重荷を下ろしたやうに胸もとが透きましました。

それからやつとのことて茶座敷に戻りました。さうして寒い／＼真夜中、雪どけの雫を聞きながらお君は獨りぼつちで考へ込みました。

「どうして新三郎さまがあんな悪戯いたづらをなすつたのだらう。」

と幾ら繰り返しても新三郎の心根が解りませんで、とう／＼黎明しづめの光が匂ふ頃まで、お君は思ひ込んでをりました。

奥さん。どうして新三郎は自分で相合傘を書きちらしたのでせうか。我から浮名を唄はれたかつたからでせうか。ほんとうに可笑しなことで御座ります。さて其から何事もなく月日が立ちまして雛祭も昨日の夢となりました。

霞が關の御屋敷から疾うにお暇をいたゞく筈のお淺は何分奥様が御手放しになりません

ので、まだ歸つてまゐりません。お君は、このことを考へますと、やつぱり思ひ込んだ厄年の禍が身にふりかゝるやうで、土蜘蛛のやうな宿命の網が、ねば／＼した絲を巻きつけて日毎、夜毎にお君の後髪うしろがみを曳摺ひきずつて行くかと思はれます。それに目には見えない鐵の鎖が乳房から脊中に巻きかけて何んといふ心の重苦しさをせう。

この頃では眼が冴えて一と晩、まんぢりもしないこともありません。それから來し方、行末、生れること、死ぬこと、誰れにも譯らない深秘の覆面を覗き込んで、今にも落ちさうな災を怖れながら目を送つてをりました。ことにお祖父さんの死顔や、亡骸に觸つた指先の冷めたさが、眞黒な幻を描きだして、お君の小さい心を惱ましてをりました。ほんとに此頃は、夜もおち／＼寢られないせぬか眼はくぼみ、頬はおち、すつかり面おもやつれがして、幽靈のやうになりました。

「この幻に取りつかれて死ぬかも知れない。これが脊擔しよつてた運命なのだらう。厄年に呪はれてしまつた……」

と、沁み／＼泣きあかしたこともありました。

いつか陽気な時節になりました。あの、媚めかしい春がやつてきたのです。向島や上野は今を見頃の花ざかりで、花見がへりの道化姿が桐屋の前を通ります。大川の水もゆるんで花見船が舳を並べた賑わい、どんちやん騒ぎのさなかなを。柳橋から屋根船が意気な船頭の艦聲に送られて緩やかに河波をわけてゆきます。

桐屋の庭も春めいてまゐりました。袖櫃の八重櫻が綻びそめて藤棚もほのかに色つきました。茶室の樹蔭から若葉の香ひがして、麗かな朝日が障子の棧にはら斑のやうな影を映します。障子のかげから眞蒼な顔をだして、晴れ渡つた大空を見詰めてをりましたお君には、青葉の精がのり移つたかと思はれます。

ある朝、お君はぼんやり思ひ洗んでをりました。やつぱり獨りぼつちで考へてゐたのです。すると二羽の燕が、ちう／＼囀りながら茶室の廊から飛び込んで天井をぐる／＼廻つて何が争ひながら水屋の軒から飛んで行きました。すると、お君の膝へ何んだか落ちてき

ました。お君は珍らしげに取り上げて見ますと、褐色の絹糸より柔い髪の毛で日向に曝らすと、きら／＼光ります。異人の髪に違ひありません。遠い國で摘み取つた薔薇油の香ひがして、まだ温い手ざはりが残つてをりました。燕は渡り鳥だと言ひますから遠い巴里の都から、この髪の毛を咬へてきたのでせうか。それとも柳の煙る築地の居留地から、窓の落ち髪を拾つてきたのでせうか。とにかく異人の髪に違ひありません。

「お祭のとき顔を見合はせて、につこり笑つた異人さんの髪ではないかしら………何かの因縁で、きつと燕が、あの方の髪を咬へてきたのに違ひない。」

とお君は、恍惚と其日を思ひだすと、異人の笑顔が目の前に、ちらついて言ひ知らぬ懐しさが心に沁みてまゐりました。

夢のうちにお晝もすぎて、とう／＼夕暮になりました。

奥さん。春の黄昏ほど若い人たちに物淋しいものはありません。心の底が、しと／＼落ち込むやうな、櫻はれて行くやうな遺瀨なさ、悲しみの足音が近づくやうな言ひ知らぬ心

の愁です。あの夕闇が悲しみを持つてくるのです。思ふ人の顔が暗がりおもてぎぬに消えてゆく果敢なき、別れた人の行方を懐しむ切なき、何にもかも暗闇の面おもてぎぬ 帕おもてぎぬに包まれて、あとには懐しい香がのこつてをります。お君の瞳から涙が湧いてまゐりました。

やがてあの掛時計から白い小鳥が顔を出して、ぼつ／＼と鳴き立てました。お君は、しみ／＼と聞いてをりました。

「私はお祖父さんの死骸に觸はつてしまつた。新三郎さまの手のひらに戀といふ字を書いてしまつた。もう仕方がない。死と戀とに可愛がられてしまつた。それだから戀の手にだきしめられ、死の幻に口を吸はれて死ぬのが、私の宿命に違ひない。それが厄年の呪ひかも知れない……」

と思ひ沈むと、除夜の鐘を聞ながら思ひ込んだ行末の怖しさが、だん／＼、ほんとの出来事になつてゆくのが、怖はくつて堪りません。そのうちに夕闇が募つて、とう／＼夜の香がいたしてまゐります。その夜にかぎつて何事ぞせう。お君は胸さわぎがして頬が火

照り、なんとも言へない心や身體からだの重苦しさ。眞赤な心が魂の底から湧き立つて、いくら押へようとしても押へきれない高潮たかしほのやうな心持、軽い雲にのつて浮き立つやうな氣持、その夜は朧ろ夜で温いそよ風がお君の頬を吹き立てます。なにか柔い絹のやうなものを抱きしめて、切つない／＼心の淋びしさを、温い胸につたへたかつたのです。お君は燭臺の焰を見つめてをりました。青い焰が炎え立ちますと、どことなく「生命」の亡びるやうな「時」の死ぬやうな微かな音がして、蠟が溶けて行きます。

青い焰と青い瞳。お君は除夜の、夜更けに、ヴェニウスの銅像ブロンズを手にして、若い異人の顔を思ひだしたと考へて、せめては懐しい面影に、切ない思ひを慰めようと思ひました。この銅像ブロンズは近頃、手にしないせぬか、埃に埋れてをりましたが、塵を拂つて手にしながら燭臺の灯影に見詰めますと、何んと言ふ懐しさぞせう。ちやれた眉毛から青い瞳が光つて、夏祭の暮れがた思はず顔を見合はしたあの笑顔が、にこやかに現はれてまゐりました。

「ほんとにお懐しいこと……」

とお君は我れ知らず銅像を抱きしめてをりました。

やがてお君は、もう一べん燭臺の灯影にかざして、つくづく銅像を見詰めますと、青錆びた唇が、かすかに動いて何か叫びます。お君は銅像の唇を耳許に近づけましたが無の叫びも聞えませんが。耳から離せばまた聞えます。なんとといふ心の迷ひでせう。あの掛時計の「死ぬ」といふ叫びが銅像の唇から出るかと思はれたのです。それを戀しい人の言葉と思ひ込んだのは、どんなに恥しかったでせう。

お君は、ほつれんと考へてをりました。今まで獨りぼつちでゐたのが、ほんとに悲しかったのです。今でも獨りぼつちでゐなければならぬ身の果敢なさか、どれほど遺瀨なかつたでせう。すると眞赤な思は恥しいほど炎えて、身體をのけかけたい淋びしさが募つてまゐりました。

ふと燭臺の灯影を見ますと、今朝ほどお淺の許から新三郎の處へ届いた手紙がありました。

お君はそれを手にして、つくづく見詰めてをりました。上がきにこそお君の名がかいてありましたが、宛名のぬしはあの新三郎なのです。そのなかには美しい秘密が潜んでゐるのに違ひありません。物好きな娘心が湧き立つてまゐりました。お君は幾度も封を切らうとしましたが、さすがに疾ましかつたのでせうか、手紙を膝に置いては見詰めてをりました。やがて思ひ切つてお君は封を裂くと燭臺の灯かげで読みはじめました。

奥さん。手紙にはなんと書いてあつたでせう。きつと甘い／＼睦言、二つの心が溶け合つた眞赤な魂の叫び、——手紙を讀みかけるお君の瞳から怪しい光が炎えてきました。燭臺の灯影は蒼白い頬をそめて春の夜風が、ほつれた髪を吹きます。お君は、どれほど淋しかったのでせう。獨りぼつちの悲しさが、しと／＼と身にしみて、今が今まで浮世ばれた茶室にとち籠つて、ひとりく／＼してゐた痴けさが、ほんとに怨めしかつたのです。今は初めて浮世が戀しくなりました。あの賑やかな世間が羨しくなりました。ほんとにこの茶座敷は繪本で見た傳馬町の別荘らしい氣がして、世間の聲も聞えず、逢ひにくる人もな

い暗闇に娘ざかりを葬ってきたと思へば味氣ない我が身の怨めしさ、……せめては、もう一べん若い異人の面影を呼びかへして、切ない心を慰めようと、お君はまた、小さい銅像ブロンズを手に取りました。

燭臺の灯影に、銅像ブロンズは笑つてをります。それは懐しい異人の笑顔に違ひありません。お君はちつと見詰めてをりました。この銅像ブロンズが古井戸から掘り出されたことも、夏祭の夕暮れに思ひそめた異人のことも、果敢ない夢のやうに思ひ出されて、お君の心は過ぎ來し方に飛んでゆきました。燭臺の灯影がゆらぐと、何んといふ不思議でせう。褐色かついろの髪は黒く匂つて青い瞳は黒い眼まなざしと變つてまぬります。さうして二重ふたへまがた瞼といひ顔付といひ、口許といひ、紛まぎれもない新三郎の面影となつてしまひました。

「お君さん。これほど、お慕ひ申すのに、なぜ可愛がつて下さらないの………」
と小さい銅像ブロンズが呟きます。お君は袖屏風をしながら、

「御免下さい。貴方が怖はくつて仕様が御座いません。」

と目をつぶり耳を押さへ、聞くまいといたしますと、

「怖はいと仰有るのは私が可愛い、からです。いつぞやこの手のひらに戀といふ字をおかきになつたでせう。もう忘れまじか。」

と銅像ブロンズが呟くと、戀といふ字をかいいた手のひらが目の前に現はれました。柔かい温さうな手のひら、——それを握りしめやうとしても有りません。お君は途方に暮れてをりました。もう何うして好いか解りませんが、除夜の夜ふけに思ひ込んだやうに、異様な鳥が飛んできてお君を眞黒な翼につつむと、あの怖しい宿命の塔へ飛んでゆきます。がたりと重い扉が閉しまると、あたりは眞の闇で肌寒い潤ひと、死の香ひがいたしてをります。いくら泣いても叫んでも助けにくる人はありません。もう駄目だと思ふと棄鉢の氣が湧いてまゐりました。それに何事かでせう。身體からだ中の血潮が湧き立ち、目がくるめき、喉が乾き、節々が重苦しくなつて、今にも、はち切れさうな乳房の痛み、——淋しいく人戀しさ、遺瀨いせない切なさ、物狂はしい悶えからお君は泣き倒れてをりました………

奥さん。その時です。とうとう悪魔がやつてまゐりました。あの新三郎が枝折戸をあけ、茶室の前に佇みながら、

「お君さん。御免下さい。お淺さんから手紙が届きませんか。」

と言つて茶室の閤を跨ぎました。

それから、何ういふ芝居があつたかは存じませんが、其宵から茶座敷の様子は、すっかり變つてしまひました。いつも樹蔭が差し交はして、古い藝術の香ひと木の葉の香ひがたちこめた濕つぽい暗がりの茶座敷は、淫らな羅馬の御殿と變はつてしまひました。夜なく新三郎が忍んできたのです。

奥さん。とうとう春がすぎて夏がやつてきました。あのお淺も于蘭盆の宿さがりには永のお暇を頂いてくることになりました。ある眞夜中に、お君は新三郎の袖をとらへて、

「新三郎さま。もう姉さんが歸つて入らしやいます。どうしたら宜しいでせう。とうとう身重な身體からだになりました。」

と嘆きますと、新三郎は小氣味よげに、せせら笑ひをして、

「さうですか……」

と言ひながら茶座敷を出てゆきました。お君は行燈の片あかりを照らして、しみじみ後姿を見送つてをりました。この淋しい眞夜中に、お君は、どれほど戀のながみを味つたでせう。ふと、此から生れる子供のことを思ひ出しました。さうして年越しの夜ふけに除夜の鐘を聞きながら思ひ込んだ行末の怖しさが、一つ／＼ほんとの事になつて、もう悪魔の手に抱かれてしまつたかと、思ふと諦めるより仕方ありません。

「なんといふ悲しい宿命なのだらう。もう生れついた運だと諦られよう。新三郎さまの手のひらに戀といふ字をかけたのが一生の過ちに違ひない。お祖父さんの死骸に觸れたのが生涯の産相なのさ。すつかり死と戀に可愛がられてしまつた。それだから戀の手に抱きしめられ死の幻に口を吸はれく死ぬのが宿命に違ひない。もう仕方がない。なにもかも厄年と諦めやう……」

と思ふと、茶室の片隅から死の幻が湧きだして、のしかかつてきました。するとお祖父の死相が見えて死骸に觸はつた冷めたさが指先から、腕へ傳はる、腕から胸にしみて、心の底が冷めなくなつてゆきます。背骨に水を流されるやうで、齒の根が振るへ、身ぶるひがして、銅の柱を抱いたやうに身體からだが冷えわたると、冷汗が額から流れだします。いくら話さうとしても聲が出ません。もう祖父さんの死顔が見えなくなると、冷めたい暗闇がお君を抱きしめました……

奥さん。翌る朝、黎明しひのめの光が照しても、この茶室には死の香ひが漂つてをりました。消えのこつた燭臺の灯影に、お君の亡き骸が冷えきつてゐたのです。さうしてあの掛時計から白い小鳥が顔をたして、死骸の眠りを醒ますやうに、ぼつ／＼と朝あしたを告げてをりました。

奥さん。詰らないお話をいたして、嘸ぞ御退窟ごたいくつのこととせう。この話は拵へ事か、何うかは存じませんが、とにかく言ひ囃された世間話ださうで御座います。こんな噂が立ちま

してから流石の桐屋も、俄にさびれて、とう／＼家藏いへくらも人手に渡つてしまひました。ほん
とに氣の毒なことと御座います。それはさておき、あのお君は、まつたく水鳥のやうな足
先をしてをりましたか。(完)

毒杯

羅馬の廢頽期にメッサリナと言ふ淫蕩な王妃が棲んでゐた、彼女は多くの密夫に飽き果てて、やや靜夜の眠りを欲してゐた頃、宮苑の樹蔭で歌舞したシリウスの姿を見ると、再び愛欲の心を禁ずることが出来なかつた。シリウスは華麗な貴公子であつた。併し彼には新婚の妻女があつたので妖艶な王妃の流眄ながしめにも應へることが出来なかつた。

それ故、恐しい使命が傳へられた。王妃の福祉を禱るために貴族の内から新婚の妻女を暗殺して、その髪と櫛とを王妃の秘篋に收めると言ふことであつた。人々はシリウスの妻女を暗殺するより他ほかになかつた。

このことを漏れ聞いた彼女は最後の抱擁を惜しむシリウスの膝に哀傷の涙を濺いでから淋しい町の片かけを辿つてヴェスタの寺院に這入つて往つた。覆面の姿は怪しむ人さへな

かつた。鬱蒼と繁つた樹蔭に、彼女は足の疲れを休めて、怖しい死の追求から逃れることが出来た多幸を歎びながらも、悲嘆の涙を止める譯には往かなかつた。あらゆる世間の愛着が、彼女には、もう許すことの出来ない罪惡であつた。それから彼女は柔い髪と豊ふくやかな腕や胸を飾る無数の寶石を取つて、黄昏の光を湛へた泉池に投げ入れて仕舞つた。さうして淫蕩な王妃の權力も、彼女の聖なる生命には、もう觸れることさへ出来なかつた。

最愛の妻を失つたシリウスは只管、館邸の秘室に隠れて蛇のやうな王妃の瞳を避けてゐた。もの靜かな夕暮の窓に靠れて、ヴェスタの鐘樓を眺めながら、微かに見える尼の姿をば、せめては果敢ない一生を王妃の權力に呪はれた妻の面影として彼は堪へ難い憂愁を慰めてゐた。彼は、かつて妻と肩を並べて蜜よりも甘い秘語を言ひ交はした長椅子を抱きながら、滅びた肉體の香を尋れて、地上の逸樂が斯くも脆く、斯くも過ぎ易いのを嘆いてゐた。

再び祭の夜となつた。寢室の窓から王宮の舞樂が聞えた。彼は幾度も耳を覆ふてゐた。

併し戀人の死體から昔の私語を聴くやうに、又は歡樂の悲哀が心に沁みるやうに、彼は何うしても此の歌樂に耳を捉はれない譯には往かなかつた。見えざる諧律の手が悲愁に埋れる彼の心を開いて、悠遠な藝術の樂土に連れて來たのであつた。彼は何時か舞殿の歩廊を昇つてゐた。さうして彼は圓柱の陰に姿を隠しながら、星のやうな燭火ともしびに清麗な肉體を照らされた處女達が、鼓樂に伴つて戀情の歌を唄ひながら、手をかざし足を上げる白鳥の舞を見惚ぼけてゐた。月光の射し添ふ鋪石に、長く落ちた彼の姿を見とめたのは王妃の瞳より外に無かつた。

夜の白らむ頃、舞樂は果てた。彼は石階を飾る怪像のかけに隠れて、舞殿を退出する王妃の瞳を避けてゐた。花のやうな侍女に擁せられ、多くの兵仗に闇まれて石階に一步を落した王妃は微笑を禁ずることが出来なかつた。莊重な沈黙のうちに衣摺れの叫こゑきが俄かに止んだ。

「シリウスよ。妾わたしを愛してお呉れ。妾わたしの言葉を聴きかないなら爾おまへにも死があらう……」

と王妃は象牙のやうな素肌の腕を石階の畫欄に置いて、盜人のやうに隠れたシリウスの姿を見詰めてゐた。

翌朝から王妃は彼の館邸を音づれた。日毎に鹵簿肅々とした行啓に他ならなかつた。慌しく車の扉を押し開いた王妃は入口の石階を昇りながら待臣の長揖を軽く受けて階上の密室にシリウスの姿を訪れた。門に待ち暮らす騎士の長槍や楯が闇に輝いて、車蓋に夜露の置いたことさへ多かつた。

メッサリナは妖魅であつた。かつて新婚の妻女と生別の哀傷に泣いたシリウスの心は、何時か王妃の妖麗な肉體に領せられて、時には纖手を抱きながら人倫の束縛を嘆いたこともあつた。王女のオクターヴィアと王子のブリタンニクスとに母たる王妃も愛人の愁訴には何事も拒むことが出来なかつた。その上、クラウデウス帝王の昏愚なことが却つて王妃の歡びであつた。

ある日、寺院の鐘が鳴り響いて社前には多くの犠牲が獻げてあつた。メッサリナは貴賓

を後宮に招き、親しく覆面を受けて密夫のシリウスと壯麗な婚儀を挙げたのであつた。そこには歌宴もあり、舞樂もあつた。殊に、その夜は正規の夫妻たる自由が完全に具つてゐた。

羅馬廢頽期に起つた斯う言ふ不倫の事蹟は史實として確證する典據も無いから、唯だ故老の言葉に徴して年誌に記るす許りであると、羅馬の史家タキトゥスは言つてゐる。

婚儀の報をクラウヂュス帝王の耳に叫いたのは嬖臣のナルキシウスであつた。王冠を傾けて嬖臣の私語を聽いてゐた帝王は俄に佩刀を抛つて、

「予は、王妃の死體が見たい」

とナルキシウスに命じた。帝王の顔は殘照を受けた火山よりも恐しかつた。

この使命を拜したナルキシウスは聽て帝王の手から授る可き財囊に憧れながら、鞭を擧げて先づ護民官廳を音づれた。さうしてルキユルスの宮殿を手兵で圍むことが彼の要件であつた。何故なら王妃は婚儀の夜から此宮殿に隠れて明け易い短か夜の歡樂を怨みなが

ら、其の淫蕩な生命を保護するために數多の騎士を養つて置くと云ふ流説が高かつたからである。

宮殿の正門で馬を降りたナイキシウスは王命に依つて王妃を捉へに來たこと聲言しながら、廣い宮殿を隈なく探れたが王妃の姿は見えなかつた。死骸のやうに垂れた寢室まどかけの窓帷まどかけを上げてかうのとりも、鴻の羽蒲團には、柔い肉體の移香がにほふ許りであつた。固く閉ざした浴室とほその扇を覗いても、玉を湛へた水盤に物淋しく朝日が照り添うてゐた。圓柱まるばしらの片かけや薄暗い廊下の窓際に立つた裸體の石像を幾度となく見誤つてから、彼は咳きながら庭園に降りてきた。青々と繁つた棕櫚の樹蔭に、王妃の姿を見たのであつた。王妃は日向の若草を褥として、母君のリーグと樂しげに話して居た。宛ら飽き果てた密夫のやうに、連翹の花が王妃の指から落ちたのは、木立を漏れるナルキシウスの姿を見とめた瞬間であつた。

「あゝ、母君、ナルキシウスが参りました」

と王妃は母上の膝に泣顔を埋めた。

怪人の口から迸る噴水に正午の光線が虹を見せて梢に群がる小鳥の歌は繁かった。王妃の顔は鉛よりも白く色を失つた唇から嘆きばかりが漏れてゐた。ナイキシウスは王妃の前に拜俯して帝王の劇しい怒と怖しい使命を傳へた。王妃は涙に充ちた瞳を上げて、葉影を漏れる青空を眺めながら、人間の逸樂と死滅とが、斯くも脆く、斯くも速いのを嘆く許りであつた。併し帝王の言葉は何人も拒むことが出来なかつた。王妃は慄へる手を動かして靜かに五彩の羅を脱ぎ棄てた。豊麗な肉體の上に立木の葉影が搖いて、葡萄のやうに垂れた乳房の下には、かの不偏な造物主が肉樂の泉として、人間に與へた生命の叫びが不斷の曲譜を奏してゐた。王妃は幾度か寶刀の束を握つても空しい努力に過ぎなかつた。

「帝王の言葉は羅馬の法律で御座います。その言葉に反むく者は耶蘇教徒のやうに、醜い死體を町に曝らさなければなりません」

とナルキシウスは冷かに王妃の顔を見詰めた。もう涙は盡きてゐた。多くの密夫に酣睡の夢を許した、柔く温い素肌の胸を残り惜しげに撫で廻した後で、王妃は目を瞑つて寶刀

を胸に擬した。その時、人知れず背後に廻つたナルキシウスは力を籠めて王妃の身體を壓し倒して仕舞つた。劍は深く心臟を刺して鮮血が芝生に流れた。

「情人の腕に死ななかつたのが妾の恨みである」

詩のやうな嘆きが終焉の唇から漏れた。もう小鳥も歌はなかつた。戦慄と悲哀を裏んだ靜寂が領してゐた。緑の香ひに充ちた微風が血に塗みれた死體の髪を弄んでゐた。母君のリーダが亡骸を抱いて胸に残つた微温を懐しむうちに王妃の淫佚な精靈が滅びた肉體から旅立つやうに思はれた。やがてナルキシウスは寶を鑲めた腕飾と連翹の花を飾つた金環と螺蚰の櫛を死體から取つて、甚だけな母君のリーダに與へたのであつた。さうして王妃の死體は兵士に警護されて宮中に運ばれた。

玉座の前に死體は置かれた。死滅の手は神祕な美しさを死體に添へたのであつた。苦痛を刻んだ蒼白い顔に、花のやうに開いた紫色の唇から皓い齒並が微かに見えて、苦しく見開いた瞳は寶石のやうに輝いてゐた。殊に乳房の下に開いた創口は、熟し切つた柘榴の實

が、妖女の皓い齒並を待つかのやうに思はれた。その上、寢椅子の端に垂れた豊かな腕は毒蛇の鱗よりも滑であつた。

「淫蕩な生命を宿した死體の美しさよ」

と帝王は自ら死を命じたことを悔いなき譯には往かなかつた。さうして帝王は手づから死體に王冠を載かせ、數百顆の寶石を鏤ばめて樓臺の客室に運ばせた。

帝王は日夜、王妃の遺骸を離れることが出来なかつた。樓臺の勾欄に登る櫛や棕櫚の梢に朝日が照り添ふ頃も、密室の窓から月の光が射し込む夜半も帝王は死體を抱いて、悼しい追懷に耽けつてゐた。

石像のやうな、死體の唇に、幾度か帝王は物狂はしく耳を寄せて、昔の私語や呼吸を尋ねたり、又は壞はれた樂器の音色を慕ふ處女のやうに乳房の下に開いた創口に耳を當て、鼓動の韻律を求めたこともあつた。闇に輝く死體の瞳は、一旦の怒から王妃の生命を絶つた帝王の殘虐な心を怨んで、その宿命を呪咀するやうに思はれた。帝王は燭を手にして、死

體の耳もとに謝罪の言葉を叫くと灯影に照らされた蒼白の死顔に、そこそなく微笑の漂ふやうに思はれた。要するに死體の側を離れないことが長夜の宴にも優る帝王の歡喜であつた。

時間の手に醸される美酒のやうに王妃の死體は日毎に腐爛して往つた。髪も眉毛も脱け落ちて惡臭の雫が腕から垂れた。その上爛壞した創口から無數の小蟲が湧き出して、耳や鼻のなかに旅人の如く宿りを求めた。金蠅の群が樂げに又た喧しく叫きながら死體の頬に青い翼を休めて芳肉の腐されを嚙んだ。花瓶のかけに秘む黒猫は死體の指を嚙み去つた。梁に棲む鼠の群は腐つた指の爪を剥ぎ取つた。殊に夜は腐爛した死體から燐の焰が蒼白く炎えてゐた。併しクラウヂウス帝王は此の密室を無上の樂園として、死體を懷しむより他はなかつたから、政殿の玉座は何時も塵埃に埋れてゐた。

元老院に會議の續かない日は無かつた。椅子に就いた會衆の顔には、羅馬帝國の前途を憂ふる苦痛が刻まれて、彼等は燭火を點ばす頃迄も爭議を休めなかつた。さうして樓臺の密

室に隠れて、腐爛した死體を懐しむ帝王のために、彼等は三人の美姫を選んで王妃の候補に立てたのであつた。是等の美姫は門地と言ひ聰明と言ひ、殊に容色から言つても優劣を置くことが出来なかつたが、先帝の王女にあたるアグリッピナはパルラスと言ふ大官の權力に擁せられて入内の豫想が盛んであつた。もとアグリッピナは不幸な離婚に泣いて、秀麗な容姿を空しく孀居の孤獨に怨むことが久しかつた。その上、彼女は先帝の王女なのでクラウヂユス帝王とは叔姪の間柄であつた。さうして斯う言ふ近親の結婚は羅馬法令の厳しく禁ずる所であつた。

併しアグリッピナに取つては法律も、人間が作つた小さい約束に過ぎなかつた。王妃の候補に數へられてから彼女がクラウヂユス帝王の側を離れることは無かつた。寢殿の窓から帝王の眠りを喚び醒まし、紛奢を粧つた腕を托して扇を開きながら寶石のやうな瞳を注いだ。半盞の酔ひを染めた横顔を、たてこ堅琴の絃に埋めて掻き鳴らす音楽と、薰香に充ちた浴後の肉體が羅うすものから透き見える輪廓とは、帝王の心に再び肉樂の愛着を置いたのであつた。

それと同時に豊かな財囊が幾箇となく爲政者の手に置かれた。街の廣場から買つてきた奴隸の美婦は若い貴族の寢室に運ばれた。ある日、元老院や議政院の會衆は何等の反對も擾騒もなく、アグリッピナを王妃とすることに議決して議堂の石階を降りて往つた。

その夜、近親婚姻の禁令が釋かれて、翌日、アグリッピナ入内の盛儀が宮中に擧げられて仕舞つた。併しシラニウスと言ふ貴公子が、その夜、毒を仰いで死に就いたことが此の王妃の前途を豫言する兇兆であつた。この貴族は、兼れて王女のオクターヴィヤと婚約の間であつたのに、アグリッピナが王妃となつた其日に、この王女を愛兒のネロに配したからであつた。

婚儀の當夜から羅馬の主權は帝王の掌を滑つて王妃の手に移つて往つた。アグリッピナの唇から漏れ出る言葉は帝王さへ服従す可き法令であつた。妖麗な肉體に見飽かぬ痴夢を貪つた帝王は、寢室の帷とよりを漏れる朝日の光が枕に近い頃も、白い翼を着けた裸體の男女が青々と繁つた樹陰の泉に佇んで笛と琴とを合奏する壁畫を眺めながら、疲れ果てた身體からだを

動かすことさへ出来なかつた。さうして政殿の玉座には王妃のアグリッピナが自ら王冠を戴いて國政を聽いてゐた。小亞細亞や希臘地方から遙る／＼渡來した諸國の使臣は、先づ王妃の前に貢物と國書を捧げて、王妃の瞳を窺ひながら永遠の服従を誓つた。王妃の周圍には平和の女神たる尊敬と權力が溢れてゐた。多くの廷臣は王妃の前に額いて、其の肩を偷み見ながら王妃の心を迎へるより他は無つた。實際、王妃の怒はヴェスピヤスの噴火よりも恐しく、その微笑は太陽の光よりも温かつた。王妃の一顰一笑は彼等の生命を支配する黜陟であつた。嘗つてクラウヂウス帝王が奴隸から釋放してやつたナキシウスすらも、王妃の手から授かる褒賞に頼き、市民の密偵となつて町に佇み、爲政者の席に出入して讒謗や離間の間諜となつてゐた。

羅馬は王妃の羅馬であつた。王妃はパルラスの言葉を容れて愛兒のネロに王女を配した許りでなく、淫蕩な母の罪を償ふために王子のブリタンニクスから皇儲たる光榮と希望を奪つて、ネロにその位を與へたのであつた。

クラウヂウス帝王が昏淫の夢から醒めた時は、もう遅かつた。羅馬は何時かアグリッピナの治世であつた。權力に就き易い人々は、もう帝王の居室を音信れる者もなかつた。クラウヂウス帝王は全く廢帝に過ぎなかつた。

實際、人間の、あらゆる事業の中で、權力より脆く又た悼しいものは無かつた。帝王の居室に音づれる者は黄昏の光ばかりであつた。椅子の下に曳いた椅子の下に瘦軀の長影を見詰めながら、帝王は沈黙と孤獨の内に手を拱いて、今は逸樂に疲れ果て、權力に棄てられた生命の悔恨に泣くのであつた。殊に羅馬の主權に代へて、帝王が愛した王妃は、寢室の扉を開くことさへ稀だつた。その上、王妃が日毎に嬖臣のパルラスと椅子を並べて、國政を聽くことが、更に傷ましい懊惱を帝王の心に醸したのであつた。

クラウヂウス帝王は菌の類が好きであつた。秋は遠く使臣を派して佳味な菌を求めさせ晩餐の食卓に其芳烈な香を嗅ぐのが、廢帝に等しい身の快樂であつた。ある初夏の日、多くの使臣が霧に閉された山巔から生死を犯して採つて來たと言ふ珍らしい菌が帝王の食卓

に供せられた。その齒は怪人の掌ほど大きく朱褐色に濃い紫の斑點を交じへた笠が王冠のやうに開いてゐた。

殊に淫蕩な女の肌から漂ふやうな芳香が帝王の鼻を衝いたのであつた。

その夜は、王妃のアグリッピナも珍らしく食卓に就いてゐた。併し華奢を盡した食堂には帝王と王妃の姿ばかりが大理石の床に落ちてゐた。王妃は微笑を湛へながら寶玉のやうな指に花形の酒壺を取つて帝王の杯に充してゐた。その夜に限つて權力が全く王妃の身體を離れてゐた。嘗つて王妃の候補に選ばれた時に、浴後の肉體を帝王の膝に載せて、寶石を鏤ばめた素肌の腕を王冠に卷付けた昔の儘のアグリッピナであつた。帝王は過ぎし日の逸樂を懐しむ眼を見開きながら幾度が黄金の杯を舉げて高らかに歌つた。王妃が注ぐ盞にほのかに漂ふ微笑の影を見ると帝王は歡喜を禁じてることが出来なかつた。惟を曳いた窓から花壇を吹き渡る微風が薫つて、劇場の圓蓋には十日あまりの月が懸つてゐた。アグリッピナが燭を黙した頃、一羽の蝴蝶が靜かに食卓の香を尋れて素馨の花を飾つた王妃の髪

に翼を休めた。すると蝴蝶は王妃の椅子に落ちて、もう死骸となつてゐた。

『王妃の權力は恐しい。』

と口走つた帝王の心には王妃の髪が一筋毎に怖しい毒素を含んでゐるとか思はれた。帝王は漸く齒の一片を口にした。猶、その美味を賞しながら幾片も口する内に、帝王の顔は俄かに青ざめて紫色の唇から夥しい血塊が胸に流れて、帝王は苦しい息の下から幾度が唇を動かしても既う言葉は聞えなかつた。

アグリッピナは物凄しい笑を漏らした。再び無上の權力が王妃の身體を裏んだ。王妃は靜かに椅子を離れ、手早く窓の帷を下ろして、片隅に立てた燭火を悉く消した仕舞つた。食卓の燭火が苦悶の跡を刻む帝王の額を照らして、妖女の手に行はれた罪惡を示してゐた。椅子に倒れかつた帝王の心臓に手を當てながら「死」の呼吸と脈搏を數へてゐたアグリッピナの心には、愛兒のネロが王位に即いて諸國の使臣や、臣延の朝儀を受ける名匠の壁畫が「想像」の手に依つて擴げられてゐた。嘗つては淫蕩な王妃に欺かれ、今は權力に饑ゑた

王妃に毒殺される帝王の死を、アグリッピナは、もどかしく待つてゐたのである。併し夜潮の引くやうに追つてゐた帝王の呼吸は靜かに恢復して、殆ど觸れなかつた脈搏は再び整調を帯びて來た。もう血塊を吐かなかつた。帝王は微かに眼を開けて王妃を見詰めた。齒類に含まれた毒素は帝王の生命を奪ふ可き力は無かつた。

狂氣のやうに驚いたアグリッピナは秘かに廻廊に出て、大理石の圓柱に凭りかゝり乍ら盡き果てた方策を思ひ煩つてゐた。やがて王妃は掌を打つて靜かに歩きだした。さうして王妃は幾度も階段を下りて階下の一室に待醫のクザンブオントゥスを見出すことが出來た。その耳に口を寄せて秘語を傳へながら王妃は身を飾る寶玉を悉く取つて彼の掌に置いた。間もなく王妃は待醫を連れて食堂に歸つてきた。

「帝王、どうなさいました」

と待醫は言ひながら毒劑を鷺鳥の羽に浸して帝王の耳に注いだのであつた。かくて羅馬帝王クラウヂウスは不幸な生命を永遠に閉ざして仕舞つた。食卓に消え残る燭火が微かに

照り添ふ死骸の額には、「人生は何物も欺惑なり」と言ふ碑銘が刻んであつた。

翌朝、市街の角や官庭の入口には帝王危篤の報が掲げてあつた。初夏の朝日を浴びながら公報を見詰める群集の顔には國を愛する憂愁が充ちてゐた。彼等は寺院に集つて火を焚き、犠牲を獻げて祈禱の鐘を鳴らしてゐた。かの迫害を苦しむ耶蘇教徒さへ敵を愛する教義として、宗徒の首が曝された牢獄の門に集り、十字架を振り翳さして帝王の祝福を祈らない譯には往かなかつた。

然るに何事であらう。クラウヂウス帝王の死が公報された其日に、羅馬の市民はネロ太子即位の報を耳に仕なければならなかつた。市民は喜憂の就く所を失つて仕舞つた。葬禮の鐘を撞いた寺院の鐘樓は、その夜、即位祝福の鐘を傳へたのであつた。市街の片かげに佇む卜人は長衣の袖を上げて太陽を仰ぎながら、世界の終滅を豫言してゐた。

新しく王位に即いたネロ帝王も空位を擁するに過ぎなかつた。玉座の後に垂れた帷の陰から絶えずアグリッピナの瞳が輝いて、ネロの言葉に耳を傾けてゐた。アグリッピナは既

う太后であつた。羅馬は猶、太后の羅馬であつた。唯だ太后がネロの言葉を藉りて殘暴な自身の心を傳へるのに過ぎなかつた。寧ろ確實に羅馬の統治權が太后の手に握られて仕舞つた。

さうしてネロ帝王は唯だ王冠を戴いた偶像に過ぎなかつた。換言すればネロは太后の權力に操られ、その恣に、玉座に踊る傀儡に他ならなかつた。

初めクラウヂウス帝王の王儲であつたブリタンニクスはアグリッピナの爲に踐む可き筈の王位を篡はれたのであつた。王子は涙を吞んで即位の式にも臨んだ。ネロ帝王を祝福する杯さへ擧げなければならなかつた。權力なき者の悲しさには、父王の寵遇を受けた臣僚達も悉く舊恩を忘れて、皆、太后の出御を石階に待ち暮らして、瞳に觸れるのを無上の光榮としてゐた。先王の黨派に屬する人々は毒殺の憂目を見ない限りは、地中海の孤島に流謫の刑に處せられて仕舞つた。殊に先王の死を怪しむ人達は即座に斬殺されて、その妻子は奴隸として市に賣られた。市街の要處に多くの密偵を放つて先王の死を疑ひ太后の秕政

を難ずる市民があらば直に公民權を剝奪して牢獄の門に繋ぐのであつた。

クラウヂウス帝王の墳地には雜草が高く生ひ繁つて、纔かに開いた眞紅の寸花が、人間のあらゆる不幸を集め、その上昏淫の惱みに一生を終つた帝王の自傳を物語つてゐた。苔むした石の面に終焉の年月と祝福の章句を刻んだ墓標には蚪蟻の群が恣に遊んでゐた。

ブリタンニクスの館邸は「死」の如く靜かであつた。獅子や豹の頭に怪人の顔を刻んだ石門には棕櫚の梢が薄暗く差し交はして、黄昏の風が渡る毎に淋しい葉音を立ててゐた。終日、訪ふ人も無かつた。時めいた臣僚の車駕は王子の邸宅を冷笑するやうに通り過ぎて往つた。殊にヴェスタ寺院に、薄命な一生を獻げた年若い尼達が姦淫の罪に問はれて、館邸の墻壁に釘殺されてゐた。鋭い釘を撃つた掌から鮮血が壁を流れ、鋪石を傳つて土に泌みだ。頭垂れたの間から微かに見ゆる蒼ざめた死顔に、星の光が照らしても遺骸を運ぶものは無かつた。

夜半近くまで灯影の漏れる寢の窓から、仄かに聞える王子の嘆きは櫛の梢に鳴く梟の眼

を見張らせ、葉蔭に眠る蝙蝠の耳を欲てさせた。併し日毎に覆面の美姫が荒廢した館邸の門を潜つて往つた。それはユニヤ姫であつた。帝王を毒殺して全く羅馬の主權を握つたアグリッピナ太后が愛子のネロに王位を踐ましめた代償として羅馬第一の麗姫と言はれるユリヤ姫を王子に與へたのであつた。それは頬を膨らした少年に綺麗な翫具を與へるのに等しかった。言はばユニヤ姫の美しい容姿を藉りて、王子の若い心に充ちた憤懣の焰を消さうとするのであつた。殊に王位を與へたネロが若し太后の制肘を遁れて羅馬の統治權を完全に握らうとする態度を示すなら、ブリタンニクスに王位を讓ると言ふ脅迫を用ゐて飽までネロを傀儡にしようと言ふのが太后の政策であつた。

ユニヤ姫も嘗つて時めいた貴族の末であつた。それ故、王子と姫との心には何時か同情の花が開いて權力に弄れた彼等の薄命を泣くのであつた。二人は若草の萌えだした泉池の邊に佇んで、希臘の神僊が人間界に齎らした夢よりも、更に美しく更に楽しい睦言を呬いて、あらゆる榮辱を遺れてゐた。木犀の薰る臺榭の椅子に凭つて姫の長笛に聞き耽ける王

子の顔には、最早や權力の消長が問題をなしてゐなかつた。彼等の姿を星座から眺める北斗の群は、地上の人としては餘りに幸福なのを審しみながら、彼等の睦言に聞き取れてゐた。實際、王子は嫺やかな姫の髪を弄びながら、その柔い胸に、帝王となる光榮よりも戀人たる多幸を見出したのであつた。悲哀は、愛の母であつた。滅亡の香は姫と王子の心に光榮も權力も奪ふことの出来ない情熱を産んだのであつた。さうして王子の憂愁を慰めるためには、かの希臘に名高いピリチスと言ふ歌妓のやうに、裳裾を翻して舞踊することさへ姫は拒まなかつた。

ネロが王位に即いてから羅馬は聖者の治世であつた。徭役を減じ奴隸を解放して、宗社を祭る度毎に、死罪の囚人が穿獄の石門から釋放された。暴虐なアグリッピナが市民の福祉を奪ふ暴政を勧めてもネロは秘かに善政を怠らなかつた。

嘗つて羅馬の郊外に棲む年若い倡女が肉樂の獸であつた嫖客を殺して、自身も毒劑を仰いだが、遂に死ぬことが出来なかつた。彼女が殺人の動機は日夜、肉體を齧ぐ苦痛を怨ん

で、せめては残忍な社會の主宰者である貴族の一人を殺して、この冷酷な制度に苦しむ多人の讐を返さうとするのであつた。さうして彼女の死罪を宣告した法官は帝王に許可の署名を願つてきた。併し判決書はネロの手から落ちた。

「斯う言ふ死罪に署名することは出来ない。罪惡は淫蕩な貴族にある。寧ろ社會にある」とネロ親しく府中の金庫を開いて倡婦の死罪を購つたこともあつた。

斯う言ふ善政を見る毎に太后は眉を蹙めた。

「妾わたしの血を受けたネロは、何うして斯くも情深いのであう……」

とアグリッピナは屢、手を拱いた。併し斯る善政も太后の眉を蹙ましむる爲めに他ならなかつた。何故ならアグリッピナの毒蛇の如き制肘と干渉から逃れる爲めには、太后の心に逆ふことが必要であつたからである。太后の心から言へば羅馬は太后自身の羅馬であつた。太后のためには、あらゆる民福を犠牲とすることが必要である。譬へば宮殿を建てるときは苛税を聚斂し、民財を奪はなければならぬ。又は新婚の良人から戀の記念として贈ら

れた寶石の追懷をなつかしみ、誇りに胸を飾る妻女があらば、悉く其を奪つて太后の髪に鑲めめるのが理想であつた。

併し羅馬が持ち得た帝王のなかで、ネロは歴史の光榮ともす可き仁君にほか他ならなかつた。善良な市民は頌徳碑を建てて、暴君のみ多かつた羅馬が、斯の如き仁君の治世に逢ふのを寧ろ奇蹟としたのであつた。

併し事實は全く反對であつた。太后の心に逆ふための仁政もネロはもう耐らへることが出来なかつた。玉座のかけからアグリッピナの權力に操られて、王冠を着けた傀儡のやうに踊らなければならぬ干渉と制肘とを、ネロには幾度か嘆いたらう……

「予は羅馬の帝王である、この無上の主權を確實に予の掌に握らなければならぬ。母君のアグリッピナは予が暴君となるのを楽しんでゐる。併し予は羅馬の主權を收めるために、先づ太后に對して暴君にならう……」

とネロが卓を打つて心を決きたのであつた。

その後、ネロは太后の嬖臣や、その寢室に招かれる貴族の罪を構へて流謫に處し若くは死罪を命じた。殊に太后に取つては敵黨の過激な爲政者と款を通じて、秘密の會議を幾夜となく續けた。その上、奴隸の美女を愛して、其階級から釋放し夜毎に寢殿の洒掃を命じた。太后が親しく選んだ王妃、オクタヴィアの寢室には、孤獨の夜よるを果敢なむ嘆きが絶えなかつた。

アグリッピナの額には堪へ難い苦惱が刻まれてゐた。もう小皺の寄りかけた額に深く刻まれた憂愁を見れば見るほどネロは愉快であつた。それ故、太后の姿を見れば直に玉座を降りて政殿の奥深い秘室に隠れて仕舞つた。

「太后の心に憤懣を刻むことが予の急務である。花よりも脆い女性の身で政權を弄ばうとする愚かさよ」

とネロは秘かに微笑を漏らしてゐた。さうして太后が會見を求めれば疾と稱して之さへ斥けて仕舞つた。

太后の懊惱は日を追うて烈しくなつて來た。嘗つて愛兒として羅馬の王位に即けてやつたネロは今、母后の手から無上の主權を奪はうとするのであつた。さうして權力は太后の手からネロの掌に移つて行くやうに思はれた。

ある日、太后は午後の日光を受けた政殿の壁畫に向ひながら、

「ネロよ。妾の手には今だに羅馬の主權が残つてゐる。又た人の心を購ひ易い權力も富も残つてゐる、妾は妾の權力を用ゐて、爾の王位おまへを奪つて、ブリタンニクスに譲らう……」

と物凄しい微笑を見せながら石階を下りて往いた。この恐しい脅迫を聽いてゐたのは、かのナルキシユスであつた。さうして、此事をネロの耳に叫いたのも彼に他ならなかつた。

「予は羅馬の帝王である。もう太后の言葉を怖れるやうな少年ではない。」

と言ひ放つた暴君の心にも流石に恐怖を禁ずることが出来なかつた。何故ならアグリッピナの手には今だに人の心を購ひ易い權力と富とが残つて居たからである。その上、王子

のブリタンニクスは愛人のユニヤ姫と薄命に泣きながら驕慢に充ちた人々が、時間のために亡びて行くのを待つてゐた。

その夜半、ネロは兵士を遣はして、ユニヤ姫を其の館邸から掠奪し、王宮の一室に幽閉して仕舞つた。

曉近い頃、此の報を得たアグリッピナは寢臺の上に坐つて、極度の驚と怖れとに暫く身を慄はしてゐた。實際、ユニヤ姫の掠奪は、太后の政策に對する致命傷であつた。

太后は窓から見える星影を仰ぎながら夜明の遅いのを待つてゐた。さうして黎明の光が宮庭の木立を染めた頃、曉の髪を梳らず寢衣のまゝ廻廊を辿つて、ネロの寢室を叩いた。併し扉は固く閉ざしてあつた。廊下の鋪石には衣を攪げて佇む太后姿が殘燭の灯影に映つてゐた。肩を叩く拳の響も止んで唯だ限りない靜寂と沈黙であつた。

太后が廻廊の窓を明けると朝風が冷かに頬を撫でた。有明の月が微に残る大空は、ほのぼのと明け離れて寺院の尖塔や劇場の圓蓋は既に茜の色に染められて、海のやうな市街は

まだ熱睡に落ちてゐた。アグリッピナは窓に靠れて帝王の目醒を待つてゐた。太后はユニヤ姫を掠奪した理由が聞き度かつたのであつた。極度の怒に炎えた太后の心が靜かに冷えて、今は圓柱に靠れながら戀する女のやうに思に沈んでゐた。殊に先頃、東洋から來たと言ふ卜筮を司る老女が太后の掌を指しながら、

「お悼はしいことで御座います、太后の掌には、やがて何物も残りますまい。」

と太后の顔を見詰めて云ひ放つた豫言が恐しく思ひ起されて、太后は希臘の貴族が、凶惡な神托を聽いたやうに身を振はしてゐた。

廻廊に立ち續く圓柱のかげに多くの石像が置いてあつた。そのなかには寢椅子の上に浴後の姿を横へた美人が、疲れたやうな、物欲しげな眼を擧げて手にした林檎を眺めてゐるのもあつた。

又は恐しい大蛇に裸形の肉體を巻き付けられて苦悶する父子の塑像もあつた。

間も無く石階を昇る足音が聞えた。太后は嬉しげに耳を欬ててゐた。それはブルースと

言ふ老將が白髯を撫しながら石階を登つて來るのであつた。

「ブルースよ。妾はネロに會見したい事がある。ネロを起して貰ひたい。」

と太后は此老將に頼んだ。併しブルースは帝王が先頃から誰にも會見を避けてゐると答へて踵を返さうとした。

「ブルース。妾はネロの母である。寧ろ羅馬帝王の母だと言ひ度い。」

と太后が此老將を睨んだ眼から憤の焰が炎えた。さうして太后はネロの暴狀を擧げ、常に元老院の會議ばかりを重じて、とかく太后の制肘から逃れようとする忘恩の態度を責めた。ブルースは白髯を撫するより他はなかつた。怒氣を含んだ太后の言葉が長く續いた廻廊に笈してゐた。

「ブルース。爾を流滴から呼び戻してネロの侍講にしたのは、この妾であつた。併し爾は妾の言葉を聽かないやうな帝王にネロを育て、呉れた。」

と太后は白髯に埋れたブルースの唇を見詰めてゐた。枝の奥から聞える反響のやうに、

彼の唇から聽て返辭の傳はる筈であつた。併し言葉の無い沈黙が續いてゐた。太后は漸く瞳を窓に轉じた。

女の胸のやうな山脈は朝日に染められて、市街に高く聳えた尖塔から禮拝の鐘が聞えてゐた。眼の下には宮苑の臺樹が見えて、櫛の梢には鳩が群の平和に鳴いてゐた。廻廊の舗石に太后とブルースの姿が長く落ちた。この老將の頬を飾る傷跡が戦場の勳功を語つてゐた。

「太后からネロ王の養育を委托されたのに相違ありません。併し私はネロ帝王を立派な帝王に教育した積りで御座います。何時も太后の願使に甘じるやうな意地の無い帝王には教育しなかつた筈であります。ネロは羅馬の帝王であります。もはや太后の愛子ではありません。それ故、太后も帝王の命には服従す可き義務があります。」

とブルースは太后の顔を見詰めながら言つた。彼の言葉には反抗することの出來ない眞理が含まれてゐた。惡罪の扉かと思はれる太后の唇は皓い齒並に強く嚙まれて、云ふべき

言葉は無かつた。白い寛衣から漏れる素肌の胸には、静脈が虹のやうに放射してゐた。光線は暗殺者のやうに太后の足もとに近づいた。太后はブルースの顔を見詰める許りであつた。

すると階段を登る慌しい足音が響いた。其は蒼白い顔に髪を振り亂したブクタンニクスが物狂はしく昇つて來たのであつた。

「王子は何處へ行くのか、何を探してゐる。」

と太后は訊いた。ブクタンニクスは慄へる足を踏みしめて、悪夢から醒めた少年のやうに物狂しい眼を見張りながら、

「何物も失つて仕舞つた。私の掌は全然空しくなつてしまつた。その失つた物は此の王

宮にある。ユニヤ姫さへ一夜の中に掠奪されて仕舞つた」

と王子は太后の膝許に泣き崩れた。

憐む可き王子よ。羅馬の王位を奪はれ、今は姫さへ奪はれて仕舞つた。涙に濡れた其腕

から、姫が幾夜に焚き込めた髪の香が、心なく減びて行くかと思はれた。柔い胸の觸感も詩を湛へ眼眸も、韻律に充ちた唇も皆、暴君の手に收められた至寶となつて仕舞つた。丁度、毒蛇に巻き殺される小羊を見るやうに、太后は王子の姿を眺めてゐた。

「王子よ。安心するが好い。妾の手には今だに羅馬の主權が残つてゐる。果實に饑ゑた鳥のやうに、多くの人達が妾の掌に集つてくる。パルラスの館へ往つて方策を講じよう。王子も後から來るが好い」

とアグソツピナは靜かに階段を降りて往つた。一段降りる毎に窓から射し込む光線が太后の髪を染めて裳裙の衣摺れが爽かに聞えた。

ブルースは何時か居なかつた。王子は靜かに立ち上つた。舖の上には王子の形が怖しい薄幸を豫言してゐた。

「姫は何うしたらう」

と呟きながら王子は圓柱に凭り懸つて手を拱いてゐた。星影も見えない夜半、暴君の命

を畏む兵士達の長槍や炬火に圍まれて、此王宮に掠奪されて来た姫の姿が、傷ましい壁畫を見るやうに王子の眼に映つてゐた。怒と悲しみの重荷を負ひながら王子は庭園の歩廊を降つてアカシヤの樹蔭に佇んでゐた。そよかな風の香ふのは、王室の一室に監禁されたユニヤ姫の亂れ髪を吹き渡つて来たのに相違ない。海のやうな蒼空を駆ける白鳥は斜に王宮の窓を掠めて、帷を降した窓から姫の姿の見られる筈は無かつた。

「姫の身には此の宮殿も牢獄に相違ない」

と叫いた王子の心には、耶蘇教徒の美女が獅子の檻に入れられる迫害の光景が描かれてゐた。やがて獅子のやうな暴君の拳に姫の肉體を打ち碎かれて、その鮮血は吸はれ、芳肉が噛まれるのに相違なかつた。

王子は怒しげに王宮を眺めてゐた。さうして象牙のやうな纖手を捉へて、乳白な肉體に手を觸れるネロの暴狀が目に見えた。たとへば廢墟の壁に注ぐ時雨のやうな、王子の蒼白い頬に涙が傳つてゐた。

四邊は物淋しい沈黙であつた。木葉の緑が香つてゐた。ふと梢に鳴く小鳥の叫はネロに肉體を與へた姫の嘆きかと思はれた。ブクタンニクスは物狂はしく王宮を仰ぐ許りであつた。その時、

「王子、何うなさいましたか」

と軽く肩を叩いたのは侍臣のナルキシウスであつた。

「あゝ、何物を失つて仕舞つた。權力を失つた私の掌には戀さへ残つてゐない」

と王子はナルキシウスの膝に顔を埋めて、ユニア姫を掠奪された悲哀を訴へたのであつた。ナルキシウスは殊更、眉を顰めて王子の愁訴を聞いてゐた。併し彼の心には、泉のやうに歡喜が溢れてゐた。何故ならネロの密偵となつた彼には、この不幸な王子を苦しめることが彼の使命であつたからである。彼はもと、姦淫な貴族の寡婦に賣られた奴隸であつたが、奸智を用ゐてクラウヂウス帝王に愛され、かの淫蕩な王妃、メツサリナを殺したのも彼であつた。さうして水草を追ふ人種のやうに、彼は權力の移り行く掌を求めて今はネ

ロのために王子の密偵となつたのであつた。併し少年のブリタンニクスは此の奸黠な侍臣を信じない譯には往かなかつた。

「私は爾おまへを信じてゐる。寧ろ爾おまへばかりを信じてゐると誓ひたい。何うか王宮に行つて姫の様子を見てお呉れ。さうして私と會見が出来るやうにして貰ひたい」

と王子はこの侍臣の手を取つて頼んだのであつた。黒い長衣に瘦軀を裏んだナルキシウスは經典に描かれた悪魔に他ならなかつた。革帯に鑲ばめた寶珠ばりが輝つてゐた。

「王子が不幸に惱む時は私の顔を思ひ起さなければなりません。權力に付き易い人々なかつて、今だに私ばかりが、貴方の侍臣ではありませんか。」

と彼は骨立つた顔を指さしたのであつた。不安のなかに一縷の希望が王子の心に湧きだした。

「私はパルラスの處へ行くから何卒か姫と會見さしてお呉れ。私の唯つた一の願である」と王子は樹蔭を離れて石竹の花が吹き匂ふ徑に隠れた。重い歩みの運びが王子の後姿を

見詰めてゐたナルキシウスは嬉しげに笑つた。それから彼は小走りに王宮の石階を昇つて帝王の寢殿に近づいた時、ふと廻廊の圓柱に身をかくした。それは室内に怒を含んだ帝王の言葉が反響こだましたからであつた。後は矢守のやうに扉を身を附けて、耳を欝くててゐた。

「ブルースよ。予の羅馬からパルニスを逐放よるしろ。少くとも夜の町をして彼の姿を見しむるな。予はもう羅馬の暴君である」

とネロは眈を吊り上げて此の恐しい使命を傳へた。ブルースは靜かに椅子から立つて、圍に手を懸けながら、この暴君に一瞥を與へた。白髯が風に散つた。

この有様を覗いてゐたナルキシウスは靜かにネロの前に現れた。

「ユニヤ姫もお手に入りましたお目出う御座います。王子はあちらの樹蔭で泣いてをりました。」

と彼は宮苑の樹蔭を指さした。併しネロは答へなかつた。豹の皮を敷いた椅子に就いたまゝ密偵の言葉が耳に這入らなかつた程、暴君は愁思に沈んでゐた。彼が思ひ惱むネロを

見るのは最初であつた。

「帝王、どうなさいました。」

とナルキシウスは再びネロの耳許に口を寄せた。ネロは始めて眼を上げてナルキシウスの顔を見た。ネロは暫らく言葉も無つた。

「ナルキシウス。權力ばかりが支配してゐた予の心に微妙な力が加はつた。それはユニヤ姫を戀する心である」

と暴君は深い吐息を漏らした。たとへば鐵片から錆が出来るやうに暴君の心にも優しい戀の花が開いたのであつた。

昨夜、兵士を遣はしてユニヤ姫を掠奪させたのはアグソツピナが王位を讓與しようとする王子に反抗して、羅馬の主權を確實に専有しようとするネロの政策に過ぎなかつた。

ユニア姫が兵仗に圍まれくつね沓音に送られて、寢殿の階段を昇つて來た時、ネロは堪へ難い好奇心に驅られて帷の影から其姿を見たのであつた。姫は寢衣の儘であつた。飾なき姫の

美しさよ。純白な衣を漏れる豊麗な肉體に、兵士の手にした炬火が輝いて丈なす髪を焦がすかと思はれた。兵士の長槍と楯とに圍まれて、女囚のやうに頸垂れたユニヤ姫は靜かに歩みを運ぶのであつた。廻廊の鋪石には露のやうな姫の涙が泌みてゐた。素絹の寢衣に炬火の焰を染めた姫の姿は遂に廻廊を曲つて仕舞つた。

その後には永遠な沈黙と靜寂であつた。又た星の形さへ見えない暗黒であつた。唯だ姫の移香ばかりが薰つてゐた。

餘りの嘆美に流石のネロも見送る許りであつた。實際、姫の姿を語るべき言葉は羅馬に缺けてゐた。さうして夜もすがら暴君は悪夢に愁殺されたのであつた。

「予は姫を愛する。寧ろ偶像のやうに熱愛したい。羅馬の主權を奪ふと同時に姫を奪ふことが必要である。併しブリタンニクスと姫とは眞に愛してゐるのか」

暴君の心には嫉妬の毒草が繁つてゐた。

「姫は王子のために涙を流してをります」

と言ひながらナルキシウスはネロの顔を見詰めてゐた。青春の驕を堪へた帝王の顔に愁の陰が影俄に射した。暴君の心に萌え出した嫉妬の毒草を、いやが上に繁らせて何等かの收獲を納めることが彼の欲する所であつた。彼は言葉を盡して王子と姫の情熱を物語つた上に、

「恐らく王子に取つては、羅馬の王位よりも羅馬第一の美女と言はれる姫の方が、尊いのに相違ありません」

と薄い唇を閉ざした。

ネロは椅子を離れて宮苑の風を遮る窓際に立つて、

「羅馬の婦人は皆、予の瞳を慕つてゐる。彼等は一夜の幸福と光榮を受けたい爲めに肉體に紛奢を粧ひ、髪や腕に無数の寶石を飾つてゐる。併しユニヤ姫は一度も姿を見せなかつた」

ネロは力を籠めて窓帷まどかきを引いた。光線は闖入者のやうに暴君の室に這入つた。壁畫は鮮

に見えた。それは鐵鎖に繋いだ耶蘇教徒の婦女を猛獸の檻に入れる圖であつた。室の中央に置いた大理石の卓脚には豹と獅子の頭が刻んであつた。花瓶は微かに薰つた。

暴君と密偵とは語る可き言葉を見出さなかつた。ナルキシウスは、暴君の心に殘虐の毒素を醸す可き言葉を考へてゐた。聽て彼は黒い長衣の袖を醸しながら、

「羅馬は帝王の羅馬であります。帝王自身の爲めに統治しなければなりません。それとも

「羅馬のネロは母後の權力に操れた傀儡であつた」と記録に書き残されたいのですか」と殊更、高く笑つた。

「ナルキシウスよ。安心しろ。予は歴史の光榮ともすべき暴君になつてやる」

とネロは胸を叩いた拳を彼の眼前に示した。ナルキシウスが不圖、瞳を轉じた時、宮苑の樹蔭に行き惱む女の姿を見とめた。それは疑もなくユニヤ姫であつた。

「あれはユニヤ姫で御座います、私は茲に姫を連れて参りませう。それから王子も呼んできて高い價を拂はせて會見させてやりますせう。」

とナルキシウスは節立つた指を上げて姫の姿を示した。それから小走りに階段を下りて庭園に出て往つた。さうしてオーグスト大帝の石像の陰に隠れて彼の姫の姿を待つてゐた。姫は薄暗い木立の繁みを選んで素足の儘駆けてきた。

「ユニヤ姫、何うなさいました」

と石像の影から姿を現はしたナルキシウスの顔は全く善良な侍臣であつた。

「あゝ、妾は爾を信じてゐる。どうか王宮から救けてだしてお呉れ」

と姫は振亂れた髪を掻き上げながら疲れた片手を奸臣の肩に置いた。ナルキシウスは姫の顔を覗ひながら、

「王子が彼處で待つて居らつしやいます」

と王宮を指さした。麗かな朝日に照された王宮の一室には窓帷が上げられて、如何にも王子が姫を待ち暮らしてゐるらしかつた。姫は疲れ果てた身體に最後の力を感じた。さうしてナルキシウスに腕を與へて先づ歩廊の石階を登つた。姫の素足は茨に傷いてゐた。喘

ぎ勝ちな呼吸が微に聞えて亂れた髪がナルキシウスの頬を撫でた。彼は肉體の柔かさと、温かさを感じながら幾度か階段を昇つて往つた。姫の瞳には戀する王子と再會の歡が輝いてゐた。併し一室の前に來た時、

「帝王……」

とナルキシウスが叫んだのであつた。姫の腕は堅く持たれた。闔は靜かに開いた。それは物凄しい顔に微笑を湛へたネロであつた。

「あゝ、ナルキシウス、爾は妾を欺いた」

と姫が嘆きの言葉を言ひ終らない内に彼は拳を上げて姫をこの室に入れて仕舞つた。闔は強い響を立て、閉された。樓上の一室には暴君と姫より他には誰も居なかつた。

「予は姫を待つてゐた」

この言葉は先づ戀人として帝王自身を紹介した最初の言葉であつた。ネロは靜に椅子に就いて姫の泣き崩れた横顔を視つてゐた。純白の寢衣が包む肉體の肩から胸に柔く描いた

輪廓の美しさと、亂れた髪の毛の香は炎えるやうなネロの心を煽つた。禮拜の鐘を聴く信徒のやうに暴君は姫の嘆きに聞取れてゐた。それは名手の音楽であつた。姫は俄に蒼ざめた顔を擧げて暴君を睨んだ。涙に濡れた瞳から憤怒の焰が炎えてゐた。

「王様、何して私を王宮に連れて來たのです。その上、樓上の一室に押し込めて番兵に見張りをさせて置くのは何う言ふ譯でせうか。妾はそんな罪を犯した覺は御座いません」

と姫は暴君の返事を待つてゐた。ネロは殊更に花瓶から石竹の蕾を取つて、其の香を嗅ぎながら優しい笑顔を見せて、

「姫は造物主から清麗な容姿を與へられてゐる。併し羅馬の帝王たるネロに其を隠してゐた。是こそ神意に悖り帝王を侮辱した罪ではないか。殊に予が命じた兵士の監視から逃れてきたのが罪で無くつて何だらう……」

と冷かに唇を閉ざした。姫は餘りの暴戾な言葉に驚いて、涙を拭ふ暇も無かつた。卓上

の花は繁く落ちた。

「ユニヤ姫よ。予は御身に頼みがある。併し帝王に對して『否』と言ふ返事は羅馬法令の禁ずる所である。予が頼みは極めて容易い。掌を返すやうに姫の心を蹴して貰ひ度い詳しく言へばブリタンニクスの代りに予を愛して貰ひたい。若し帝王の言葉を拒むなら血に塗れた悔恨の嘴が姫の心を啄ばむであらう」

と脅迫は鐵よりも重かつた。暴君は姫の唇を眺めて返辭を待つてゐた。併し權力に充ちたネロの顔を見れば見るほど、光榮に委棄されたブリニンクスの果敢ない運命が姫の心の思ひ起された。

「王様、羅馬の國には王様の歡樂が充ちてをります。貴族の姫達は皆、王様に媚を呈して、人より先きに見られるのを名譽としてをります。妾を眺めて居らしやる王様の瞳は、何れ程、羅馬の女を歡ばせませう。羅馬の帝王は妾のやうな滅びた貴族の子を愛する必要は有りません。私には、權力を失ひ光榮に棄てられたブリタンヌスト言ふ

情人があります。丁度、王様が權力を愛するやうに妾はこの王子を愛さない譯には往きままん。王様、この羅馬の都で妾の口ばかりは心の正しい註解者であります」

とユニヤ姫は心地よげに暴君の顔を見詰めた。若い驕りを湛へた顔に憤怒の色が災えて眦は張り裂けるかと思はれた。併し暴君は言葉を返さなかつた。彼は既う聞える筈の沓音を待つてゐたのであつた。實際、忙しげに駈け昇る沓音が宮殿の廻廊に聞えだした。ネロは卓を打つた。

「姫よ。帝王の前で『否』と言ふことが出来た姫の勇氣を嘉賞する。併しあの沓音を聞くが好い。あれは王子がナルキシリスに欺かれて此處に来るのだ。予は王子に逢はしてやる。併し姫と王子は此の多幸な會見に高い價を拂はなければならぬ。姫よ。御身の口か心の正しい註解者なら、予が言葉は羅馬の法令である。死罪の宣告である。王子を歡ばせる姫の言葉と行動と凝視さへ王子の死に償しよう。あゝ、もう沓音も近づいた。予は此の帷に隠れて姫の様子を視はう」

と棺衣のやうに垂れた帷の陰に、暴君は姿を隠して仕舞つた。楯の差し交はした泉を前にして白髮縮衣の豫言者が星斗を指さしながら道を説き動める言葉に、裸體の男女が樂器を置いて耳を傾ける壁畫の上に日光が近づいてゐた。

やがて悲劇の幕と見る可き王宮の一室には、怖しい脅迫の漂ふ沈黙が続いてゐた。沓音は漸く近かつた。恐しい靜寂よ。空しい手を翳さして若い生命を付け狙ふ「死」の顔が、この室の肩から視いてゐた。ユニヤ姫は椅子に靠れたまゝ手を顔に當てゝゐた。何うしてこの脅迫と危機とを傳へよう。心と心を傳へる言葉も凝視も王子の死に他ならなかつた。暴君の權力は蛇のやうに姫の身體を縛んで仕舞つた。もう廻廊の鋪石に沓音が響いてゐた。既に肩が開いた。

「あゝ、姫よ……」

とブリタンニクスが手を擴げて姫を抱擁しようとした時に、

「此處は王宮で御座います。この壁にも窓帷にも王様の權力が充ちて居ります」

と姫は王子の手を遮つて、伏目がちに窓の帷を見詰めた。重く垂れた帷からネロの瞳が光つてゐた。併し王子には何事も解らなかつた。王子は審しい眼を見張つて、愁の涙に充ちた姫の顔を見守つてゐた。さうして一夜のうちに帝王の権力が斯くも姫の心を支配したかと思はない譯には往かなかつた。

「あゝ不信な人達よ。王位に代へた姫さへネロに奪れて仕舞つた。」

と王子は何氣なく窓の帷を見詰めた。併し嫉妬と絶望に充ちた彼の心には、暴君の瞳を見出す餘裕が無つた。

「何たる無情さよ。王冠の力は斯くも女の心を支配するものか。私の手には、既う何物も残つてゐない。姫よ。姫はネロの王妃となつて多幸な生涯を送るが好い」

と王子は怨みの一瞥を興へながら悄然と闇を排して往つた。その後姿を眺めながら、

「あゝ、王子……」

と嘆いた姫の腕は固く捉へられた。

「姫よ。涙を拭へ。予は御身の涙さへ愛する」

とネロは叫びながら帷を出て、ナルキシウスを見た。彼は秘かに這入つて來たのである。

「姫を再び拘束しろ。又た太后も王子も監禁しなければならぬ。予は羅馬の帝王である。姫を泣かせることが必要である。ナルキシウス。爾の使命は茲に在る。」

とネロは拳を上げて胸を打つた。

ユニヤ姫の手は固くナルキシウスに捉へられて姫は階上の一室に幽囚されて仕舞つた。

續いて王宮は戦時のやうな騒擾であつた。兵卒の長槍と楯とは廻廊の闇に輝いて沓音が石階に絶えなかつた。彼等は王命に囚つてアグリッピナ太后を樓臺の密室に拘束したのであつた。

太后が密室に監禁されたのは黄昏近い頃であつた。密室は數年の埃に埋れてゐた。この室こそ、かの昏淫なクラウヂウス帝王が淫な王妃の死體を運ばせて、その死體が腐爛し、磷の焰が炎えるまで、悼しい追憶に耽つた樓臺の密室であつた。窓帷もなく壁畫も無い此

室は久しく逆境に泣く青年の心にも似てゐた。又は不遇の内に青春を葬つた老叟の心にも似てゐた。蛛網の巢の閉ざした荒壁には、秘室の史實が刻まれて、歴代の帝王が権力と富を用ゐて、姦淫の夜を惜んだ過去の曆にも似てゐた。埃に埋れて彫刻の缺け落ちた圓柱は昏淫な帝王の秘録であらう。

暗闇は戀人のやうに窓から忍んできた。その窓際に古び果てた豎琴が置いてあつた。たとへば終生、帝王の瞳に觸れなかつた宮女のやうに、又は許婚を尋ねて老い果てた美女のやうに、戀する男の指を待つてゐた。アグリッピナは靜かに豎琴を見詰めてゐた。この豎琴こそ、昔のアグリッピナが帝王の昏淫な心を妖惑して、王妃となりたい爲めに、豐艶な腕に、抱きしめて搔き鳴らした樂器に相違ない。宛ら古代の傳説を聞くやうに、埃を拂つて太后の手にした豎琴には、一筋の絃さへ残つてゐなかつた。

「滅びと言ふこと程、悲しいものはない」

と太后は靜かに樂器を置きながら、瘦せ衰へた腕に目を注いだ。太后の腕はいか許り淫

蕩な熟睡と痴夢とを醸したらう。その腕には昔ほどの温味もなかつた。香も色も滅びて仕舞つた。さうして、小波のやうな皺が、生命の衰へを示してゐた。その上、あらゆる罪惡を犯して手に收めた羅馬の王權は、殊更、王位に即けてやつた愛兒のネロの日を追ふて奪はれて往つた。

「容色の衰へは女の死であつた。もう妾の肉體を用ゐても妖惑される人もあるまい。權力は常に衰へた者を嫌つてゐる。権力と女の衰とは何れが速いだらう……」

太后は空しい掌を見詰めてゐた。實際、人間のあらゆる事業の中で、又た人間のあらゆる事業のなかで、権力ほど脆く女の美より悼しい者はなかつた。

その夜は星の影さへ見えなかつた。暗黒のなかから、密室の精靈が太后の耳に口を寄せ「女性の身で政權を弄ぶのは、火を弄ぶより危険いのに、政權を欲して帝王を毒殺したのは御身であつた」と絶えず叫くのであつた。太后は耳を蔽うて苦悶の裡に一夜を明かした。固く閉ざした扇の前には長槍と楯とを並べた多くの衛兵が立つてゐた。沓音は重く響いた。

「あゝ、ネロを恐れる人はあつても、妾わたしを怖れる人は無くなつた」
と太后は嘆きを禁ずることは出来なかつた。

未明の頃から太后は守兵の一人を遣はしてネロと會見を求めたが、帝王は寢室の靜寂を破る罪を責めて母后の要來を斥けて仕舞つた。

併し老將のブルーズが、親しく太后の會見を願つた時には流石のネロも拒むことは出来なかつた。

やがて密室の扉を開いたのは帝王自身であつた。ネロは全く權力と惡徳に充ちた暴君に他ならなかつた。太后がプリンニクスの位を奮つて皇儲とした少年の面影は無くなつて仕舞つた。太后は斯くも變り果てたネロの面立を見詰めてゐた。若やいだ顔には羅馬の主權を奪つた歡喜が溢れて、眉を閉ざした愁の跡こそユニヤ姫の心を奪ふことの出来ない暴君の嘆きであらう。アクリッピナは靜に密室の四邊を見廻はした。

「此處は先帝が王妃の死體を懷んだ密室である。ネロは克わたしく妾を此處に拘束した。併し

爾おまへは私の愛子であつた。さうして爾は王位に即けたのは妾の手であつた」

と太后は衰へた腕をネロの前に示した。それから、あらゆる罪惡と、帝王を毒殺した罪を告白して、

「斯う言ふ罪を犯したのも妾わたしの愛子であつたネロを王位に即けたい爲めであつた。併し爾おまへは此恩を忘れて母后たる妾を密室に拘束して仕舞つた」

と言ひ終つて流石に涙を禁ずる事が出来なかつた。併しネロは微笑を浮べて聞いてゐた。「要するに太后は子の名を藉りて政權を恣にしたかつたに違ひない。帝王の毒殺した母后の子たる予は暴君となれるのを歡んでゐる」

とネロは踵を返して仕舞つた。

「忘恩の子よ」

と太后は、丁度、自分の鑿から出来上つた醜い、腹立しい作品を眺める藝術家のやうに恨めしくネロの後姿を見返つてゐた。その上、闔は再び兵卒の手に依つて固く閉ざされて

仕舞つた。

併し其日の午後、ネロが自身の悲を認めて和解の宴を開く勅旨が發布されたのであつた。拘束された人々は皆、釋放された。樓臺の密室から解放されたアグリッピナは斯う言ふ激變が、暴君の心に起つたのも、母たる自身が親しく面接して其罪を責めたからであると思はれない譯に往かなかつた。

「矢張、ネロは妾の愛子であつた。」

と言ひながら太后は皺の寄つた掌を返して見た。そこには羅馬の主權が戻つてきた様に思はれた。ブリタンニクスは再びユニヤ姫と抱擁することが出来た。併し姫の心は解くことの出来ない疑惑に結ばれてゐた。

實際、怖い毒劑が用意されてゐたのを、誰も知る人は無かつた。羅馬の邸外に住むロクストと言つた老女は毒劑の名手であつた。老女は屢々貴賓の邸宅に出入して政治上にも偉大な權威を持つてゐた。何故なら彼女は爲政者の秘密と歴史の裏面を知つてゐたからで

ある。宏莊な邸宅には何時も毒草の花が咲いてゐた。一瞬のうちに何う言ふ帝王も美姫も死體とする爲めには、此老婆以外には毒劑を求めることは出来なかつた。

この日、老女を音づけたものは彼の奸黠なナルキシウスであつた。彼は數百顆の寶石を收めた筐と重い財囊を老婆の手に置いた。老婆は此の贈物を手にし乍ら、恐しい黒猫が獲物を見出したやうに物凄しい微笑を漏らした。

「妾の拵へた毒藥の效能を見せて上げよう」

と言ひ棄て、老婆は階段を上つて往つた。

樓上には市場で買つて來た奴隸の女達が、毒草の花を絞り、莖を碎いて毒劑を採つてゐた。

奴隸の中から最う肉體の成熟した女を連れて老婆はナルキシウスの前に現れた。奴隸の女は泣くより他になかつた。老婆は鞭を擧げて奴隸を打つた。鞭の鋭い音が午後の靜けさを破つた。唯だ一枚の白布が奴隸の下肢を覆ふ許りであつた。老婆が細い腕に力を籠めて

鞭を打ち下ろす毎に奴隷の脊なかに血が沁じみ、熟く切つた林檎のやうに爛れて、悲鳴を上げてゐた。

斯う言ふ苦痛よりも奴隷の女は死を選んだのであつた。彼女は老婆の掌を嘗めて毒劑を飲んで仕舞つた。その瞬間に「死」の手は固く奴隷の身體を捉へて生命を奪つたのであつた。市街の片隅に撲殺された犬のやうに、ナルキシウスは死體を靴尖で蹴りながら満足の意を表した。さうして彼は毒劑を老婆の手から貰つて王宮に歸つてきた。宮苑の樹蔭には王子と姫とが、肩を並べて歩いてゐた。ナルキシウスは彼等の姿を見ながら微笑を漏して姿を隠して仕舞つた。

王子と姫とは暮れ方の日影を選んで櫛の樹蔭に歩みを止めた。彼等は再び戀人であつた。而し姫の心には言ひ知らぬ疑惑が暗示されてゐた。昨日の午後、姫の心を奪ふことの出來ない代償として王子の死を誓つた暴君の心が一瞬の間に斯くも變ることが出來ようか。この和解の晚餐には驚く可き陰謀が計られるに相違ないと姫は思ふより他になかつた。

殊に、

「予は姫の涙まで愛する。姫を泣かせることが予の快樂である。」

と叫んだ暴君の言葉が、恐ろしかった歴史の一頁として姫の心を繰り返された。而しアリタンニクスは何事も疑はなかつた。再び姫と楽しく語ることが出來た歡喜が、王子の心に溢れてネロの暴狀を憤り其の殘虐を恨む餘地は無かつた。さうして王子は愁はしい姫の返辭や、眉を顰めた顔を覗ふと却つて姫の心を疑はない譯には往かなかつた。王妃は靜かに姫の横顔を見詰めてゐた。樹蔭を漏れる黄昏の光が、石竹の花を飾つた姫の髪を照らしてゐた。

「姫の心には復た恐怖が起つたのか。それとも王宮で一夜を過したので、あの暴君に戀せられるのを光榮とするやうになつたのか。」

と王子は頸垂れた横顔から姫の瞳を覗いた。臉には寶石のやうな涙が溜つてゐた。

「王子の心で王様の心を批判しては往けません。羅馬の王宮では、人の心と言葉とが別

の世界に棲んで居ります』

と姫は豫言者のやうに王宮を指さして怖しい心の暗示を物語つた。而し王子は不信な教徒であつた。悲哀を裏した静寂のうちに噴水の音が微かに聞えた微風が柔い草を撫でた。もう日は王宮の蔭に沈んで星座が仄かに瞬いてゐた。夜會を告げる音楽も聞えだした。

「姫よ。私は往かなければならない。姫も後から来て、黄金杯を舉げてお呉れ」

と王子は接吻を與へてから林の徑を辿つて往つた。姫は王子の後姿を見送る許りであつた。

「人間を司配する「滅亡」の悪魔が、私達の幸福を狙つてるのに相違ない」

と姫は草の上に泣き倒れたまま起き上ることも出来なかつた。やがて姫は楯に隠れたアウクストゥス大帝の石像の前に辿つて往つた。多年の風雨に曝らされて、苔の蒸した石像は微笑を含んで姫を迎へた。

「ああ、不幸なる戀人の生命を救ひ給へ。權力に棄てられ、名譽に脊かれた王子をして

水く我が胸に抱かしめ給へ。』

と姫は固く像臺を抱いて、胸像の唇から返辭を待つてゐた。小鳥の叫きは繁かつた。黄昏の風が姫の髪を弄ぶ計りであつた。

ユニヤ姫が夜會に臨んだ時には、もう酒壺が運れてゐた。羅馬の帝室に傳はる黄金杯は卓上の花を映した。猛獸の毛皮を敷いた椅子には、アグリッピナ太后や王妃のオクターヴァが嬉しげに座つて、絶えず微笑を漏らした。暴君の顔は花瓶に隠れてゐた。帷を上げた窓から星の光がほの見えて尖塔を離れた弦月も羨しげに地上の夜會を眺めてゐた。

ネロは黄金杯を手にした。酒壺を傾けて注いだのは、かのナルキシウスであつた。

「羅馬の神よ。我が罪を許して今宵の和解を祝し給へ」

とネロは飲み乾した杯をブリタンニクスの手に置いた。黄金杯は月形をし他の酒壺からナルキシウスの手に移つて注がれた。杯の上には王子の若やいだ顔が浮いてゐた。

「羅馬の諸神よ。此の晚餐に永遠の幸あらしめ給へ。』

と言ひ終つた王子の唇が黄金杯に觸れた時、王子は闐然と椅子に倒れた。もう瞳には光さへなかつた。

「王子は少年時代から卒倒する習慣があつた。」

ネロは死體を見ながら満足の微笑を禁ずることが出来なかつた。併しユニヤ姫の椅子を離れたのは知らなかつた。

「ああ不幸な戀人よ」

と姫は王子の死體を抱擁して熱い接吻を興へた。毒素は蛇のやうに唇から唇へ傳はつた。もう姫と王子とは名匠の鑿に成つた「抱擁」の死體であつた。唯だ死骸に輝く寶石と石竹の花ばかりが、美しく、又た果敢なかつたユニヤ姫の生命を暗示してゐた。

「ネロよ。爾の名は人類の歴史を飾る絶後の暴君であらう」

と言ふはアグリッピナの悲嘆であつた。實際、羅馬の主權は太后の手を離れてネロの掌に收められて仕舞つた。太后が脅迫して制肘を離れば、王位を譲らせると言つた此の王

子も暴君の手に依つて毒殺されたのであつた。併し暴君も姫の心を奪ふことは出来なかつた。

その夜は激しい風雨の夜と變つた。王子と姫の死骸は抱擁のまゝ石棺に收められた。併し奸黠なナルキシウスが、姫の死體から、あらゆる寶石を奪ひ取つて、石竹の花ばかりを髪に残した儘、永遠に石棺の重い扉を閉ざして仕舞つた。

この石棺は、マルキシウスの丘陵に運ばれた。其處には兼れて數百尺の土層が掘り下げてあつた。

風雨は一層激しかつた。兵卒は炬火を翳さして墓地を示してゐた。かのナルキシウスは腕に力を籠めて「人類の秘密」のやうに、「歴史の秘録」のやうに、此の石棺を投げ込んで仕舞つた。

(完)

大正三年十月三十日印刷
大正三年十月二日發行

(定價拾錢)

不許
複製

著者
發行者
印刷者
印刷所

後藤末雄
東京市神田區佐久間町四丁目二十三番地
植竹喜四郎
東京市芝區愛宕町三丁目二番地
細萱武四郎
東京市芝區愛宕町三丁目二番地
東洋印刷株式會社

發行所

東京市神田區佐久間町四丁目二十三番地
振替東京一二九五三・電話下谷三四一九

植竹書院

278
J

終

